

295

2023 春号

施設設計を考える ④ 宿泊施設の今、これから

ひろば

JIA 建築家大会 2022 沖縄 参加レポート

連載：新型コロナが変えた仕事のスタイル 第3回

覗いてみました他人の流儀

海外レポート

未来へ継承したい風景

良質な建築、これからのまちづくり

連載：弁護士から見た建築家「トラブルを未然に防ぐ」第4回

温故知新

活動報告

建築ウォームアップ

卒業設計をふりかえる

学生の会 @ joint 活動報告





インテリアを通して 快適な生活空間を提案する

リリカラ株式会社は、1907(明治40)年に神奈川県小田原市で荒物雑貨商山吉商店として創業。昭和に入り東京・新宿に出店すると、襖紙や表装材料、和洋紙の卸・小売を専業とし、住宅の洋風化に伴い1955(昭和30)年には壁紙の製造・販売を開始しました。1989(平成元)年に社名が現在のリリカラ株式会社になり、現在は壁紙やカーテン、床材などインテリア商品の企画・開発・販売や、オフィスのインテリア設計・施工など通して空間づくりを提案しています。

営業開発部の佐藤敏之さんに、注力していることや取り扱い商品についてお話をうかがいました。

壁紙の企画から開発・販売まで

当社は昨年創業115年を迎えました。社名は壁紙のカタログ名だった「リリカラ(Lilycolor)」から付けられました。Lily=百合の花のオフホワイトはインテリアの基準色であり、この色をベースにするという意味が込められています。

壁紙、カーテン、床材の企画から開発・販売までを行うインテリア事業部と、オフィスの移転やリニューアルの際に空間を提案して設計から施工までを行うスペースソリューション事業部に分かれており、住宅からオフィスや商業施設まで、インテリアを通して快適な空間を創造し、ご提案しています。

デザインと機能を備えた壁紙

壁紙は、ベーシックな量産タイプから、1000番台と呼ばれる色や柄が豊富で機能性を備えたものまで数多く取り揃え、使用するシーンごとにカタログを展開しています。一般住宅用で消臭や汚れ防止機能などをもった準不燃壁紙は「V-ウォール」、ホテルや商業施設、医療・福祉施設向けの木目やモルタル柄などバリエーション豊富な不燃壁紙は「ウィル」、準不燃と不燃の両方を網羅したあらゆる建物で使える壁紙は「ライト」に収録されています。その他、「らくらくリフォームプレミアム」に収録した下地の凹凸を目立ちにくくする厚手のリフォームに適したものの、「リリカラ マテリアルズ」に収録した和紙や織物、金銀箔など自然素材にこだわった壁紙なども用意しています。



東京ショールーム 壁紙約2,500点、カーテン約1,500点、床材約500点を展示

カタログ「ウィル」に収録されているフリース壁紙は、表面が塩ビで裏面にフリースを使用した新しいタイプの不燃壁紙。下地からきれいに剥がすことができるため、新築時に採用いただければリフォーム時の施工も簡単で工期短縮にも繋がります。ホテルや宿泊施設のリフォームにも最適です。

空間や用途に合わせて商品を展開

カーテンも空間のコンセプトやシーンに合わせて選んでいただけるようにカタログを展開。住宅向けの「アンドタイム」「サーラ」や、価格帯を絞ったオーダーカーテンを収録した「リエッタ」「リエッタ アネ」などがあります。

床材は、キッチンや洗面所など水まわりで使える「クッションフロア」や、集合住宅や店舗、商業施設で質

感を追求した複層塩ビタイル「エルワ イタイル」、帯電防止と防炎性能を備えフリーアクセスフロアに適した「レイグランタイル」などを取り揃えています。自社製品以外にも、コルクタイルや人工芝なども取り扱っています。

廃ペットボトルをカーテンに

また当社は環境問題にも積極的に取り組んでいます。「エシカ」は国内で回収した廃ペットボトルをリサイクルしてできたカーテン。学校などで採用されており、このカーテンを通してインテリアを身近に感じてもらいながら、環境問題の学習にも役立てていただきたいと考えています。壁紙でも、余分な商品をつくらぬ工夫や、火山灰のシラスを使った商品、コーヒーの廃材を使った商品の開発を進めています。



リリカラ株式会社

www.lilycolor.co.jp

壁紙、オーダーカーテン、床材など、インテリア商品の企画・開発・販売。オフィス空間や施設のインテリア設計・施工、プロジェクト管理も行う。

本社/東京ショールーム 東京都新宿区西新宿7-5-20 TEL: 03-3366-7824

■東京ショールーム 営業時間: 10:00~16:30 休館日: 毎週水曜日、年末年始、お盆

目次

● 特集

4 施設設計を考える ④

宿泊施設の今、これから

- 4 量から質へ 多様な旅のあり方を宿泊施設にする 佐々木達郎建築設計事務所 佐々木達郎
- 6 集落文化×「伝泊+まーぐん広場」が創る「日常の観光化」によるまちづくり
アトリエ・天工人/奄美イノベーション 山下保博
- 8 伝統建築と新築ホテルの共存 カンデオ・ホスピタリティ・マネジメント 穂積輝明

● ひろば

- 10 REPORT: JIA 建築家大会2022 沖縄 永峰綜合計画事務所 永峰麻衣子/ELKoei 佐藤尊司
日本大学大学院 長谷川理奈/芝浦工業大学 井筒悠斗/東京電機大学 小山満大/日本大学 野村月咲/日本大学 伊藤綾香
- 12 連載: 新型コロナが変えた仕事のスタイル 第3回 チーム作業をつなぐ そして守るファイル共有術 スタジオネオ 伊波サチヨ
- 14 interview: 覗いてみました他人の流儀 出口道生氏に聞く 日常や体験、現代社会をデザインの視点で考える
Bulletin編集WG
- 16 海外レポート 日常生活からみる アブダビという都市 フォスター・アンド・パートナーズ (Foster + Partners) 横松宗彦
- 18 未来へ継承したい風景 日本橋、銀座エリアの景観・歴史・環境遺産 G建築総合研究所 小田恵介
- 20 城北エリア (KNIT) に広がる多様な風景 PAX建築計画事務所 鈴木和貴
- 22 良質な建築、これからのまちづくり 『人新世の「資本論」』にみる今後の建築まちづくりの視点
一行き過ぎた資本主義の問題ー 小川真樹建築総合計画 小川真樹
- 23 連載: 弁護士から見た建築家「トラブルを未然に防ぐ」第4回 建築士の監理義務 山崎哲法律事務所 安藤 亮
- 24 温故知新 職能こそ建築家の本分 三上建築事務所 益子一彦
- 25 抱負を語る 森を次世代に ハイランドデザイン一級建築士事務所 高橋正嘉
抱負を語る ひとまず自分でやってみた Y建築設計 熊谷善紀
- 26 活動報告 交流委員会Eグループ 施設見学会の開催 一屋形船からの東京夜景見学ー きんでん 若佐明継
- 27 交流委員会Fグループ 施設見学会・懇親会開催 ーヒアシンズハウスを見学ー 三晃空調 重田誠紀
- 28 建築ウォームアップ ー建築のはじまりかたを探るー 相手の声に耳を傾け 今この時に全力を尽くす
三菱地所設計 萩尾昌則
- 29 卒業設計をふりかえる みんなの顔が見える居場所をつくる YY architects 庵原義隆
- 30 学生の会 @joint 活動報告 小さな建築家 日本大学理工学部建築学科 高松えみり
次世代のタマゴたち 今自分にできることを 日本大学理工学部建築学科 野村月咲

● あとがき

- 31 ひといき 週末の愉しみ トーヨーアサノ 浅沼俊宏
- 31 編集後記
- 2 パートナーズアイ リリカラ株式会社 インテリアを通して快適な生活空間を提案する

表紙写真: 上「BEB5 軽井沢」設計 佐々木達郎建築設計事務所 (撮影: ナカサ&パートナーズ)
中「伝泊 The Beachfront MIJORA」設計 山下保博 × (アトリエ・天工人+奄美設計集団)
下「カンデオホテルズ京都烏丸六角」(提供: カンデオ・ホスピタリティ・マネジメント)

宿泊施設の今、これから

量から質へ 多様な旅のあり方を宿泊施設にする

—星野リゾートの施設を通して—

佐々木達郎建築設計事務所
佐々木達郎



1. 地域の自然や文化を顕在化する

私が初めて関わった宿泊施設は、2005年に竣工した「星のや軽井沢」という星野リゾートが運営するリゾートホテルの物件だった。当時の宿泊施設のビルディングタイプといえば、都市型のシティホテルか、地方の温泉旅館、宿泊特化型のビジネスホテルが一般的であった。「星のや軽井沢」は、谷の集落というコンセプトのもとに、緑豊かな軽井沢の環境に溶け合うように、建物が用途ごとに分棟配置され、建物の集まりが、1つの集落をつくるように計画されたものである。敷地周辺を流れる湯川を敷地内に引き込み修景池として計画された風景は1つのホテルの計画というよりも、まさに集落をつくっているような計画であった。また、地中熱利用、水力発電といったその場所の資源を活かしエネルギー自給率は70%で計画され、エコリゾートとしても先進的なものとして評価された。この現場を経験した私は、ホテルを計画する場所の風景、資源、環境、文化を活かした、その場所そのものの魅力を滞在の魅力として顕在化させることこそが、宿泊するというだけではなく、滞在を楽しむ体験を提供する宿泊施設をつくる方法なのだと確信し、その後の活動の原点となっている。

2. SNSにより多様化する旅のかたち

東京オリンピックやコロナ禍を経て、インバウンド需要の変化やマイクロツーリズム等、旅のかたちは時代と共に常に変化を続けている。ゲストが旅に求めるものは、旅行先の観光地を巡る団体ツアーの旅から個人の特別な体験のための旅へ大きくシフトした。それに伴い、宿泊施設のかたちもライフスタイルホテル、グランピング、民泊等、多様化が進み、新しいサービスが次々と生まれている。背景にあるのは、ネットやSNSの普及である。マスメディアのような画一化された情報ではなく、個人から発信される膨大化した情報網の中から自分の価値観にあった好きな情報を選択するようになったことで、自

分の価値観と近い情報が集まるようになり、同じ価値観を持つスモールコミュニティが混在する時代となっている。また、InstagramやAirbnb等のWebサービス、旅行を取り巻く環境の変化も著しい。多様な価値観が、同時に混在する世の中に対して、宿泊施設に求められるコンテンツや求められる空間は、さらに多様化していくと感じている。

3. ご近所と繋がるマイクロツーリズム

星野リゾートが観光客のための都市観光ホテル「OMO」ブランドを2018年に立ち上げた。幸運にも設計者として関わらせていただいた。欧州の事例を視察し、観光客向けの宿泊特化型ホテルが、街のにぎわいをつくる要素として機能していることに驚いた。日本との違いは明白で、ホテルのロビーは街に面し、多くの人がそこで仕事や待ち合わせをし、ルーフトップでは毎日のように人が集まり賑わいの場となっていた。当時、日本の宿泊特化型ホテルはビジネスホテルがほとんどで、エントランスには、チェックインカウンターが配置され、ホテルのセキュリティ上の問題や旅館業法の制約により、結果的に閉じられた構成となっていることがわかった。「OMO5東京大塚」では、チェックインカウンターの自動化や、配置の工夫など、街の賑わいに貢献できる計画とし、ホテルを街に開くことを意識した。

また、ホテルスタッフが街を案内するというサービスも展開している。壁面に「ご近所MAP」という地図を設けている。単なる観光案内ではない、ホテルからの徒歩圏内にあるご近所の魅力に着目しているところが特徴で



「OMO5東京大塚」左：ご近所MAP、右：ヤグララーム

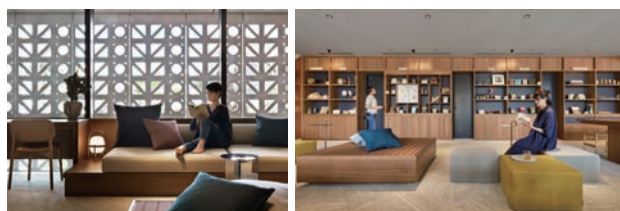
ある。知らない土地へ旅行に来ると、昔ながらの小さなお店や、この時間のこの風景といった、地元の人しか知らない場所等、本来ある魅力を体験しないで帰ってしまうことが多い。そういった街の魅力とゲストを繋ぐ役割もホテルが担うことで、それぞれの場所がもつ、独自の魅力が旅の体験として提供できるようになっている。

また、「ヤグラルーム」という客室を設計した。ビジネスホテルのツインルーム同等の20㎡の広さの客室に、立体的な家具を利用して、寝るだけではない楽しみのある滞在空間を提供している。小さな客室の中でも、家族や仲間、カップル等で旅を楽しむために、コンセプトに合った客室デザインが可能である。

4. 日常の風景にある作品のプラットフォーム

コロナ禍の2022年に開業した、「OMO5沖縄那覇」では、沖縄で日常的に出会う、民芸や工芸の職人がつくる作品を展示する「ゆんたくライブラリー」を設けている。アート作品ではない、沖縄の日常的な営みの中で生まれる作品に着目している。また、沖縄の職人がつくる花ブロックをモチーフとしたGRCのスクリーンでホテルのファサードをつくり、ゲストが寛ぐラウンジの光をコントロールしている。このような場所が、沖縄の文化をつくる職人たちとホテルゲストが出会う場となることを期待している。

ホテルがプラットフォームとして機能し、地域に潜在する魅力を可視化する役割を担えると、ホテルと地域との繋がりが街を変えていくきっかけになれるのではないだろうか。OMOブランドでは、日本各地に出店が進んでおり、このような試みで、各地の魅力を可視化していければと考えている。



「OMO5沖縄那覇」 ゆんたくライブラリー

5. 個人の趣味から街を活性化する

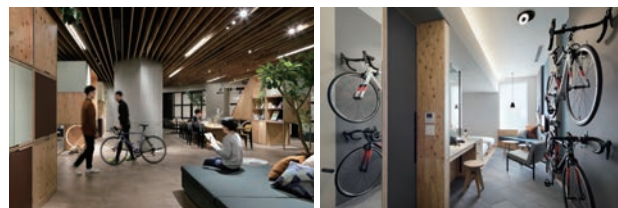
OMOブランドと同時に、20～30代の若者をターゲットとする「BEB」というブランドも開発が進み、「BEB5 軽井沢」が計画された。利用するゲストの年齢層によっても、空間に求められる機能や質は変わるべきである。ここでは、ホテルの中心に、若者が仲間と集うための「TAMARIBA」という場所をつくり、「ホテルでルーズに過ごす」というテーマのホテルを設計している。旅をし

なくなった若者たちを取り込むため、夜な夜な火を囲み、語り過ごすことができる空間を提供している。周辺にはレストランや温泉が近接しており、エリア全体が連携して相乗効果を生んでいる。



「BEB5 軽井沢」 左：TAMARIBA、右：焚き火

茨城県JR土浦駅の駅ビルのコンバージョンのプロジェクトでは、自転車をテーマにしたサイクリスト向けホテル「BEB5土浦」を設計している。そこでは、自分の自転車を寝泊まりする客室まで持ち込むことが可能となっている。自転車を愛するサイクリストの価値観に特化したホテルを実現し、霞ヶ浦をサイクリングする体験とホテルのサービスが補完関係を持つことで、街と関わりをもつ新しい層を生み出すことができています。



「BEB5土浦」 左：TAMARIBA、右：サイクルルーム
(撮影すべて：ナカサ&パートナーズ)

6. 量から質へのシフト

2017年に観光立国推進基本計画が閣議決定され、国策として観光立国の実現が我が国の経済発展のための重要課題と位置づけられた。訪日外国人の旅行者数は、コロナ禍に入る直前の2019年頃には3000万人を超え、観光地ではインバウンド需要への対応が求められた。コロナ禍が始まる2019年頃までは、インバウンド需要を見込んだ観光政策が、人口減少が進む地方経済の活性化の期待となっていた。一方で、インバウンド宿泊者数は、大都市に集中し、各地の観光地は、オーバーツーリズムで地元の住民が暮らしにくい環境が生まれてしまった。コロナ禍により、インバウンドの訪日外国人が減少した今、今後の理想的な観光のあり方も考える必要がある。すでにある観光地の来訪者を増やすことも必要であるが、量ではなく質を高める方向にシフトすべきである。また、日本の地方には、見過ごされた素晴らしい自然や、産業、営みが埋もれている。どこへ行っても同じ空間ではなく、各地方や地域の多様な魅力が顕在化し、その場所を持続可能な状態にするような宿泊施設がさらに必要である。

集落文化×「伝泊+まーぐん広場」が創る 「日常の観光化」によるまちづくり

アトリエ・天工人
奄美イノベーション
山下保博



1. はじめに

2021年7月世界自然遺産に登録された鹿児島県の奄美群島には、今なお手付かずの豊かな自然環境が残っています。それだけでなく、さまざまな歴史的背景の影響により約360の集落が750年以上残り、方言や唄、踊りなどがそれぞれに少しずつ異なる独自の文化が今日まで継承されてきたことは、世界に誇るべき貴重な事例です。

私は、自身の故郷である奄美の「集落文化」を次の時代へ伝えることを使命とし、4つの異なるタイプの宿泊施設「伝泊」や地域交流拠点「まーぐん広場」の設計および運営をしています。また、地域住民と連携した集落文化体験プログラムを観光客へ提供するなどして、両者の交流や地元雇用の創出に取り組んでいます。こうした集落の「日常を観光化」するまちづくりを通して「誰一人、何一つ取り残さない社会」の実現を目指しています。

2. まちづくりへの参入

私は、建築家として素材・構造・構法の開発を中心に、これまで数々の革新的な建築で評価をいただけてきました。視野を世界規模へ広げていく中で、今後社会において「環境」というキーワードが重要になると考え、未利用資源を新しい建築素材として再編集した建築、消費エネルギー「0」を目指した循環型住宅、伝統的古民家を海外に移築し建設した文化交流施設など、環境配慮型の建築にも精力的に挑戦してきました。

しかし、建築という「点」のデザインでできることに限界を感じたことから、徐々に社会＝「面」をデザインする「まちづくり」の研究に着手しました。慶應義塾大学のゼミでは空き家問題や江戸時代の循環型社会に関する研究を約5年間行い、その後障がい者人口が約4割を占めるドイツ・ベテルという街の在り方に感銘を受けたことから、九州大学では高齢者・障がい者・観光客を交えた地域活性のまちづくりについて、6年間研究しました。

そんな中、奄美大島でのリゾート開発に携わった際に、島内で増加する空き家に関する相談を受け、この利活用を模索することとなりました。また、奄美群島が世

界自然遺産の登録を目前に控える中で、国内外の富裕層によって安く土地が買い荒らされていくこと、オーバーツーリズムにより地域コミュニティや貴重な文化資源が壊されていく危機も迫っていたことから、2016年に奄美大島でのまちづくり事業をスタートさせました。

3. 「伝泊+まーぐん広場」を中心とした事業の拡大

「伝統的・伝説的な建築と集落文化を次の時代に伝える」というコンセプトのもとスタートした「伝泊」は、空き家となった伝統的な古民家の改修から着手しました。稼働率が高くななくても運営を継続できるように、改修時に建設当時の姿に戻すのではなく、古民家が集落の中にあることを踏まえて経過した「時間」を尊重し、家の伝統や歴史を残すと同時に初期費用を大幅に抑えるなど、建築家であることを活かした工夫を施しています。

2018年に伝説的なスーパーマーケットを改修して誕生した「まーぐん広場」は、集落住民と観光客のどちらにも求められる機能を複合させることで、両者の出会いの場となっています。「福祉×観光×地域のまちづくり」を実現する拠点であるために、高齢者施設(有料老人ホーム・デイケア・訪問看護の3種類)の運営、学童や塾の開催、伝統料理を提供する食堂の展開、アートや音楽のイベント実施等、地域の声に耳を傾けた企画および運営に努めています。

そして、2019年には「伝泊 The Beachfront MIJORA」、2021年には付帯するフロント兼レストラン&バー「2 waters」が完成しました。この新築の高級ヴィラリゾート施設が、現在の会社の利益の7割を生み出しており、それによりまちづくりの推進と会社経営の両立が実現しています。

2023年1月現在、奄美群島内における自社施設は32



島のときと対話する宿「伝泊 古民家」



「まーぐん広場」 「まーぐん」とは奄美の方言で「みんな一緒」の意



島の自然と対話する宿
「伝泊 The Beachfront MIJORA」



眼前に広がる空と海に向き合い、
心の奥行きを整える静謐な時間を過ごす

棟44室まで拡大しました。コロナ禍においても稼働率を維持し、拡充に力を入れたことで雇用はさらに拡大し、2016年に2名でスタートした従業員数は100名以上、その7割が地元雇用であるなど、奄美大島北部を中心に多大な雇用を創出しています。

4. 環境を守る取り組みとその評価

世界自然遺産で海外からも注目が集まっていることも鑑み、関連施設内ではさまざまな環境に配慮した取り組みを実践しています。

- 客室やレストランに設置したコンポストでできた肥料を自社農園で使用し、ハーブや野菜をレストランで提供
- アメニティのノンプラスチック化と部屋置き廃止
- 周辺住民と連携したビーチ清掃の定期開催
- E-Bike貸出による二次交通の見直し
- 小風力発電と太陽光発電による「エネルギーロスゼロ」の実現に向けた実証実験

こうしたSDGs達成に向けた積極的な取り組みを通して、2021年に国際的なエコラベル「グリーンキー」を2つ取得しました。改修をコンセプトとした「伝泊 奄美 古民家」「伝泊 奄美 ホテル」「伝泊 フレンドリー」の3種類の施設と、新築の「伝泊 The Beachfront MIJORA」のそれぞれにおいての取得となりました。

5. 文化を守る取り組みとその評価

奄美の「日常を観光化」というコンセプトを持つ上で、主役となる集落住民と観光客の交流の機会を創出することが重要になります。その主たる手段として、集落住民が行事や遊び、自然体験といったさまざまな体験

プログラムを、観光客へ提供し、伝統文化を次世代へ受け継ぐための仕組みとしています。

さらに、まちづくりを行う企業として、地域の素材を活用した高付加価値な商品の開発や伝統技術の保全にも取り組んでいます。

- 「AMATSUMIZU」：障がい者支援施設で採集・加工した植物と、麻由来の天然成分CBDを掛け合わせた高付加価値なオリジナル商品の開発
- 「RPAP」：地域固有の植物と器をアートという視点を介して再構築し、販売およびイベントを開催
- 「大島紬」：後継者不足解消および伝統技術の継承を実現するため、地元企業・賛同する島外企業・大学と連携した新たな展開を模索
- 「伝泊 Catamaran」：本島と沖縄の「アイノコ」の特徴を持つ奄美独自の船をリデザインし、宿泊客へのアクティビティへ活用

こうした取り組みは、2020年度「第6回ジャパン・ツーリズム・アワード」において最優秀賞にあたる国土交通大臣賞とUNWTO 倫理賞のW受賞に続き、2021年グッドデザイン金賞（経済産業大臣賞）、2022年第12回地域再生大賞優秀賞を受賞しました。国外では2022年「LUXURY LIFE STYLE AWARDS 2022」において「Best Luxury Resort Architecture in Japan」を受賞するなど、まちづくり事業における海外での評価も高まりつつあります。



伝統行事の八月踊りなど、多彩な体験プログラムを提供



文化を担ってきた島のおじ・お婆の経験や知識こそ奄美の宝物

6. 最後に

人間の体を構成しているのが37兆個の「細胞」であるように、地球上の伝統および文化を担っている単位は「集落」です。細胞と同じように、集落がネットワークを組むことで都市や国になり、外部の情報が入ることで健全なコミュニティとなります。集落の特色を掘り起こし、充実させ展開することが、持続可能な社会のあり方だと考えています。

奄美の自然と集落と人が持続していくために、宿泊施設の灯りがともる場所から活気の輪をひとつひとつ大きくしていくなかで、この波紋を奄美から日本、そして世界へと広げ、集落に徹底的に寄り添ったまちづくりを行います。

伝統建築と新築ホテルの共存

—国内外の旅行者に伝統文化を繋ぐ—

カンデオ・ホスピタリティ・
マネジメント
穂積輝明



「使う人が自ら企画する」をコンセプトに

私は建築を専攻していましたが、学生時代からデベロッパーの設計実務に携わる機会がありました。その過程で「建物を使う人と建物を企画する人が同一である」ことが極めて稀であるという事実に気づき、建築の企画を使う人が直接手掛ければイノベーションが起これると確信しました。特にホテルではその溝が深かったので「使う人が自ら企画する」をコンセプトにホテル事業を展開してきました。当社がチェーン経営を行いつつも毎回企画を進化させる理由も同じです。顧客のニーズの進化に合わせて常に建築企画を進化させる。これは「使う人」でなければなかなかできません。このギャップに事業の面白さを感じています。

カンデオホテルズは2005年創業の独立系ホテルオペレーター（運営委託会社）であり、建築中を含め日本全国に29棟5,950室を展開しています。ビジネスホテルとラグジュアリーホテルの中間領域のブランドポジションに位置し、最上階の展望露天風呂・手作りで高品質な朝食ビュッフェ・デザイン性の高い建築空間をコンセプトに「唯一無二の四つ星ホテル」を展開しています。

ホテルチェーンオペレーターは、1つ雛形をつくったらそれをコピーペーストするのが一般的ですが、当社は前の店舗より必ず次の店舗は進化させるという方針で、毎回新しい企画を盛り込んでいます。また地域ニーズに合わせて商品企画も柔軟に対応しています。

今回ご紹介する2つのプロジェクトは当社チェーンの中でも極めて特殊な企画となっています。

伝統的な京町家をホテルに再生

2021年6月に開業した「カンデオホテルズ京都烏丸六角」の敷地には、築127年の表屋造りの京町家が建っており、維持費の問題で閉鎖されていました。名前は「伴家住宅」。京都市登録有形文化財です。

既存建物は敷地の間口いっぱいには建っていたのですが、一部が増築で当該部分は文化財ではないため、解体が可能でした。そこで文化財部分は完全保存・フル改修して建設当時の姿に還元し、解体した増築部分の奥に新築10階建てのホテル（106室）を建設し、さらに解体後の敷地には外気浴が楽しめるスパ棟を新たに建設する計画としました。技術的にもコスト的にも極めて難易度の高いプロジェクトでしたが、クライアントの文化的な建築に対する深い理解から実現が叶いました。

京町家を再生したエリアでは、オリジナルの設えを完全に還元しつつ1階はホテルレセプションとラウンジとし、2階はライブラリーカフェ・ワインバー・朝食レストランとして利用しています。新築で古民家風の建物を再現するホテルは京都市内に数多く存在しますが、オリジナルの京町家そのものをホテルに転用している例は稀です。逆に、町家そのものに宿泊する場合は、設備面での古さから利便性が犠牲になるケースが多く見受けられ



「カンデオホテルズ京都烏丸六角」京町家を改修したエントランス



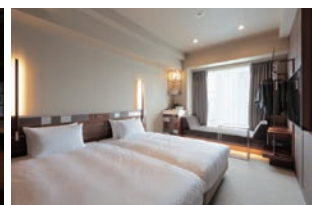
外観



エントランス



レストラン



客室

ます。本プロジェクトは築127年の京町家の空間をホテルユーザーとして長時間体験でき、かつ宿泊は最新型のホテルに泊まれるという珍しい企画になっています。

実際に日本人のみならず、歴史文化を好む欧州を中心とした外国人利用客が数多く宿泊しています。ホテルとしての再利用を通じて、閉鎖していた京町家が数多くの方々に向けて復活した意義は大きいと感じています。

文化財は解体か保存か、という二択でせめぎ合うケースが多く見受けられますが、良い部分は残しつつ時代のニーズに合わせて変更すべきは変えていくというスタンスが、経済的にも文化的にも最適な処方箋であると感じています。

お寺の本堂の直上にホテルを建設

「カンデオホテルズ大阪心斎橋」は、1808年に再建された三津寺の本堂を、曳家を3回実施しながら基礎工事を行い、本堂全体を覆うように上層部に鉄骨造180室のホテルを新設するプロジェクトです。

戦時中の大空襲においても奇跡的に残った本堂は類い稀なる歴史的価値を有していますが、檀家の減少により建物の維持改修費用の捻出が課題でした。そこで敷地を事業主に借地し、その上にホテルを建設することを認め、地代を維持改修費用に当てていくプロジェクトを推進しました。古くから存在するお寺の本堂の直上に存在する新築ホテルは世界でも例がありません。



「カンデオホテルズ
大阪心斎橋」
(完成イメージパース)



三津寺本堂を建物に内包 (完成イメージパース)

敷地は大阪・御堂筋に面して凄まじい歩行者交通量があり、本堂を見ながらホテル棟にチェックインするアプローチとなっています。

三津寺の住職と副住職は極めて画期的な発想をお持ちであり、自分たちの宗派の布教には一切固執せず、広く世界的に敷衍する宗教体験の一部として、お寺での信仰体験を提供したいと考えておられました。当社も特定の宗派に偏ることはできませんが、人類に普遍的な信仰心を再度見直すべきかけを提供する、という立ち位置であれば、ホテルのお客様へ中立的にご案内が可能となります。写経や朝のお勤め、心を整える禅風の朝粥の提供など、企画を練っている最中です。こちらは今年の11月26日に開業予定です。

地域との繋がりを増やす

上記2つのプロジェクトは、いずれも日本の伝統文化建築を再利用しつつ新築ホテルを併設した例です。地元住民のみならず、世界中から集まるホテル宿泊客が地域の伝統建築に触れ、またそれを通じて地域の皆様との繋がりを増やしていける可能性を強く感じています。

当社はもともと、ランチやディナーの営業は全店で行っていません。朝食は周辺に朝ごはんを提供する店が稀なので直営で行っていますが、ランチやディナーは当社のスタッフが直接地域のお店に赴き、誠実に美味しい料理を提供しているお店を見出して積極的に宿泊客に紹介しています。そうすることで世界中から集まった宿泊客のお金が地域に還流し、経済的な地域貢献ができるからです。当社が紹介する飲食店は連日満席になることも珍しくありません。

今回の2つのプロジェクトはその枠を超え、建築的なアプローチから既存の文化的価値の高い建築物と新築ホテルを重ね合わせることで、建築物の利用頻度や来訪客数が上がる一方、競争過多のホテルとしても唯一無二の差別化を図っています。まさに既存の伝統文化建築とホテルとの長期的な共存共栄のモデルになります。

日本は長期的に著しい人口減少が予測されますが、逆に日本に旅行したいと考える外国人は世界中で増えています。日本全国に存在する伝統文化建築は、洗練された意匠や職人技の結集であり、力強いメッセージ発信力を持っています。それらを国内の域外の方々、また世界の人々に繋ぐ意味でも、これらの取り組みが日本中で増えていくことを強く期待しております。

2022年10月20日(木)、21日(金)、22日(土)に沖縄で開催された「JIA建築家大会2022 沖縄」の参加レポートをお届けします。

地域のたからもの



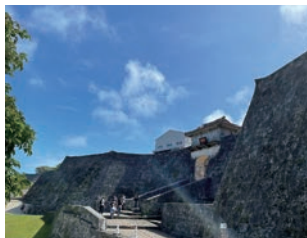
永峰麻衣子

関東では秋の空気の10月下旬でしたが、沖縄はまるでやかな風に包まれ、沖縄大会の色鮮やかなエンブレムそのままの嬉々とした陽射しで、半袖で心地よい気候でした。

大会3日間はとても充実したプログラムでしたが、中でも首里城視察は心動かされる時間でした。平成の復元を終えたのも束の間、2019年の大火災、2022年11月着工を目前に、担当者のみなさまが着々と歩みを進める姿勢に感銘を受けました。大いなる自然に抗うのではなく、伝統を受け継ぎ、共に時を重ね前進する姿勢に、遅くそして美しいものを感じました。主たる正殿は焼失しましたが、城壁と空間の深淵を形成する要所の門は、青々とした空の下、琉球王国の礎を象っていました。

首里城に隣接した玉陵(琉球王国代々の墓)への訪問は、建築を通して死生観に思いを馳せる一時でした。沖縄支部支部長伊良波さんの設計された首里染織館は、地域の材料・手法を多く用いながら、新たな伝統文化発信の場として複合的な建築でした。金城町の石畳道では、祀られたシーサーと鮮やかな花々、風土と調和した住宅街に人々の生活を垣間見、幾重もの歴史のいたずらに翻弄されながらも築き上げられた、首里城周辺の持続的で豊かな空間を体験することができました。

これまでZoomでの活動が主でしたので、対面では初めてお会いする方も多く、沖縄支部の温かいおもてなしのお陰で、みなさまと盃を重ね、語らい、心ゆくまで時間を楽しみました。各地域の建築家が課題と問題に果敢にチャレンジし、たからものを創造し続けている様に接し、たくさんのエネルギーをいただく初めての建築家大会でした。



首里城城壁、白い切妻の建物は復元工事の建屋



守礼門にて、常任幹事のみなさまと

南西諸島の 亜熱帯気候に 出迎えられる



佐藤尊司

初代会長の丹下健三から先代の六鹿正治、当代の佐藤尚已まで、1987年から繋がる日本建築家協会のJIA建築家大会2022沖縄に参加。羽田から那覇に着くと、南西諸島の亜熱帯気候の出迎えを実感する。空港から首里城までの都市景観では沖縄の特徴的な建築要素の1つ、花ブロックのファサードや黒川紀章Designの沖縄県庁舎、国場幸房Designの那覇市庁舎の現代建築がある。

首里城視察ツアーに合流。沖縄の歴史・文化を象徴する城で、首里城跡をはじめ、琉球王国のグスクおよび関連遺産群が世界遺産となっている。現在、焼失した正殿の再建が行われており、その状況を視察する。

大会の会場は香山壽夫Designの那覇文化芸術劇場「なはーと」で、大会式典、表彰式、シンポジウムに加え、小劇場やホワイエの沖縄作品展示や「香山壽夫ドローイング巡回展@沖縄」をまわり、2021年に建築家会館で開催された「香山壽夫ドローイング展」の記憶と重ねる。

大会は国内外の来賓・会員でありAmerica, Harborのphraseが記憶に残る。会場の全聴講者は米国東海岸Ivy League Academicの薫陶を授かる。

My excursionで、南部は那覇市の国際通り街・おもしろまち新都心の都市景観をはじめ、糸満市の平和祈念公園や大度海岸(ジョン万次郎 上陸の地)方面の自然海岸景観を祈・訪問。重なる偶然で、同日に今上天皇皇后両陛下が即位後初めて沖縄を訪れ平和祈念公園を訪問された。

中部は北谷町のAmerican Village、地域の特性を活かしUSAの雰囲気前面に押し出す街を巡る。北部は今帰仁村に今帰仁城跡の世界遺産、名護市に象設計集団Designの沖縄名建築の名護市庁舎を巡る。県内の建築や景観を記憶し、那覇から羽田、帰京する。



大会式典



平和祈念公園 沖縄平和祈念堂

学びとなった建築家大会

JIA 学生会員 長谷川理奈
日本大学大学院



初めて建築家大会に@jointの学生5人で参加しました。シンポジウムや首里城見学ツアーでは、実際の仕事の話や現場見学をさせていただき、大学の授業や課題だけでは見つけることができない建築への新たな視点を広げることができました。また、ウェルカムパーティやレセプションパーティでは地域を超えて建築家の皆様と関わることで、未来の建築や学生の活動について50人以上の方々とさまざまな視点でお話することができました。

私はちょうど就職活動中で、将来自分が建築家として何を目指しているのか悩んでいる最中だったので、建築家の皆様の輝かしいお話はどれも勉強になりました。また、学生の活



ウェルカムパーティで、六鹿JIA前会長、市村広報委員長と

動に興味を持ってくださった方々と今後の活動や関東地域以外での学生やJIAの繋がりなどを相談させていただき、@jointの活動の幅をさらに広げることができました。

今回の建築家大会では、沖縄らしさを満喫しながら、少し背伸びをした建築について学ぶことができ、学生一同とても充実した3日間を過ごせました。運営の方々をはじめ、学生を暖かく迎え入れてくれた皆様、本当にありがとうございました。2023年度の常滑もぜひ参加したいと思っています。

建築の集合を肌で感じる

JIA 学生会員 井筒悠斗
芝浦工業大学



建築は人の集合の産物であることを改めて認識した沖縄大会であった。ウェルカムパーティをはじめ、さまざまなプログラムがコロナ禍で失われた繋がりを再び紡ぐ起点になったことは間違いない。建築家やメーカーの方々の手を交わし笑い合う情景は、建築の目指すべき在り方であり、同時に建築に関わる人々の生き方であった。人との関係をつくり出す建築家は、やはり、その繋がりを大切にしていることを実感した。また、その関係の中で、ひとつの建築をさまざまなリソースの集合としてつくり、そこに、人間同士の繋がりも織り込まれていると改めて発見することができた。

非日常的な体験

JIA 学生会員 小山満大
東京電機大学



私は、沖縄大会で遠方支部の方々と接する機会をいただき、とても貴重な経験ができた。特にクルーズ船内で行われたウェルカムパーティでは、就職についての考え方や構造分野の可能性についてのお話など、いろいろな意見を聞くことができて、とても勉強になった。また、沖縄を訪れたのは建築に興味を持って以降は初めてで、東京の建築物とはまた違い沖縄の文化の詰まった見た目や島の建築物ならではの形状など、興味深い点が多くあり、歩き回るのがとても面白かった。数日間の滞在では見て回る時間が全く足りなかったのも、また訪れてみたい。

今、感じたこと

JIA 学生会員 野村月咲
日本大学



2019年、首里城で火災が発生というニュースをテレビで見て、高校生ながらにとっても悲しかった。今回は高校の修学旅行以来の沖縄訪問でとても楽しみにしていた。特に再建中の首里城を見られるのは、ある種特権のように思う。完成した形は長く存在するけれど、その途中段階はほんの一瞬。日本全国から集まった材木、再建中の光景や火災を免れ残ったもの、すべての融合がとても美しく感じられた。火災は悲しい出来事だったが、確実に未来を見ている光景だった。建築家の皆さんの話を聞きながらその瞬間を拝見し、さまざまな建築に触れることのできた沖縄大会はとても有意義なものだった。

学校では学べないこと

JIA 学生会員 伊藤綾香
日本大学



沖縄大会では建築に携わるさまざまな方とお話することができました。長年実務に携わってきた方々の建築に対する熱い会話の中に、学生ながら場の一員となって飛び込み、お話ができることが何よりも良い経験となりました。建築は対話なくして生まれないことを身をもって感じました。また、城址と集落を巡るツアーにも参加しました。沖縄の天候は非常に不安定ですが、見学している間はずっと青空でした。建築と青空のコントラストを感じながら、途中で建築家の方々に建築や構造の特徴を教えてくださいながら見学ができ、大会全体を通して有意義な経験となりました。

チーム作業をつなぐ そして守るファイル共有術

—クラウドサーバーの活用とセキュリティ対策—



個人協力会員
スタジオネオ
伊波サチヨ

コロナとの付き合いも丸3年となり、社会もそれ以前の姿を取り戻すようになってきました。IT系の企業でも原則出社に戻す企業も出てきていますが、スタジオネオはテレワークを継続し、この期間で身につけたそれ以前よりもバージョンアップした仕事のスタイルを実現しています。連載1回目ではデジタルツールを使ったコミュニケーション、2回目はテレワークでのスタッフの勤怠管理やプロジェクト管理の方法をご紹介しました。最終回となるこの回では、場所に囚われない共同作業のファイル管理とセキュリティ対策についてご紹介します。

社内サーバーへの社外からのアクセス

これまで社内の共有ファイルは、自社オフィスの中にあるファイルサーバー（オンプレミス型）に保存していました。それはスタッフ全員で共有できる外付けハードディスクのようなものですが、外付けハードディスクとの違いはスタッフ1人1人にログインアカウントをつくりアクセスできるフォルダの権限を変えるなどアカウント管理ができることで、外部委託業者のサーバーエンジニアに構築してもらったものです。導入費用も保守管理費用もかけて運用しているものでした。

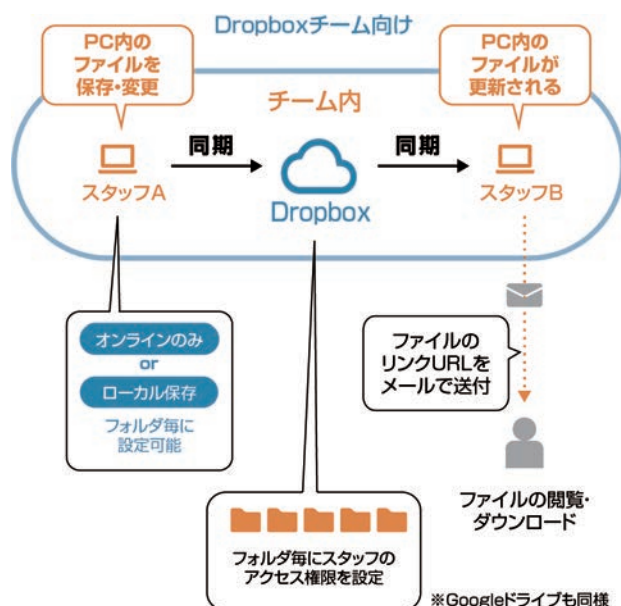
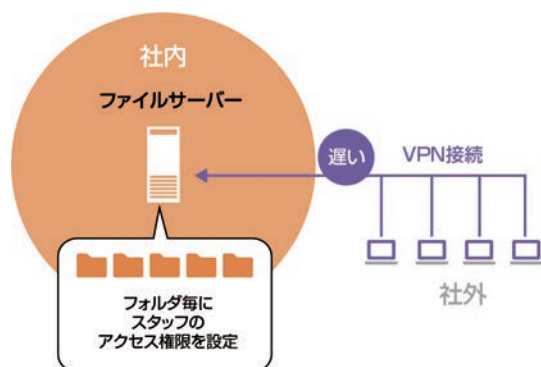
コロナ以前にも、私が自宅から会社のサーバーにアクセスできるようVPNネットワークも整えていました。そのため緊急事態宣言が出た時も、社員にVPN接続を許可したためスムーズにテレワークを始めることができたという経緯があります。社外にしながらも社内ネットワークに入ること、皆が社内にいるのと同じように仕事ができるようになりましたが、ファイルの表示速度は

遅くストレスのかかるものでした。自分のPCに移動させて作業をしたくなりますが、複数人で同時に共同作業をしているのでそれも難しい状況でした。

PCと同期できるクラウドアプリ Dropboxの活用

その問題から、今動いているプロジェクトの制作ファイルはファイル共有アプリ Dropboxを利用することにしました。Dropboxは、ブラウザでアクセスしてアップロードするという方法で使用している方は多いと思いますが、ローカルファイル（自分のPCファイル）での同期機能がとても便利です。メンバーの1人がPC上で保存したり変更を加えるとオンラインのファイルも同期され、さらに共有しているメンバーのPCのファイルも同期されます。アップロードやダウンロードの手間もなく、自分のPCを操作しているだけなので遅さにストレスを感じることがなく共同作業にもスムーズです。

私たちはこの共有機能を使って共同作業を行い、チャットアプリのSlackで「保存して閉じました」「了解。開きます!」といった具合でリアルタイムに共同作業を進めていきます。念のためファイルの更新時刻を確認して「まだ同期されていないみたいなので、確認をお願いします」などと確認を取り合ったりもしています。



意外と知らないDropboxの便利な機能

PCとDropboxの同期はとても便利ですが、クラウド上のファイルが大量になり全てを同期してしまうと、PCのハードディスクがパンクしてしまいます。そこで便利なのがローカルに保存したくないフォルダは、右クリックで「オンラインのみ」にするだけで、ローカルファイルの容量は0 KBとなりファイル名やフォルダ名だけが見える形になります。そのファイル名をダブルクリックすれば、再度ローカルファイルとしてダウンロードされすぐに開くことができます。またファイルの上で右クリックで「オフラインアクセスを許可」とすると再びフォルダごととその中のファイルがローカルに保存されます。

さらに便利な機能としては、社外の人にメール添付できない重いファイルを送付する場合、ギガファイル便などのファイル転送サービスを使わなくても、PC上(=Dropbox内)のファイルの上で右クリックし「Dropboxアドレスをコピー」を選択し、メール本文でURLを貼り付けてお知らせすれば、受け取った側はブラウザでそのファイルを閲覧したり、ダウンロードしたりできます。動画ファイルはダウンロードしなくても、ブラウザ上で再生できるので送る側も受け取る側も余計な手間がかかりません。

※Googleドライブも同様な機能を備えています。

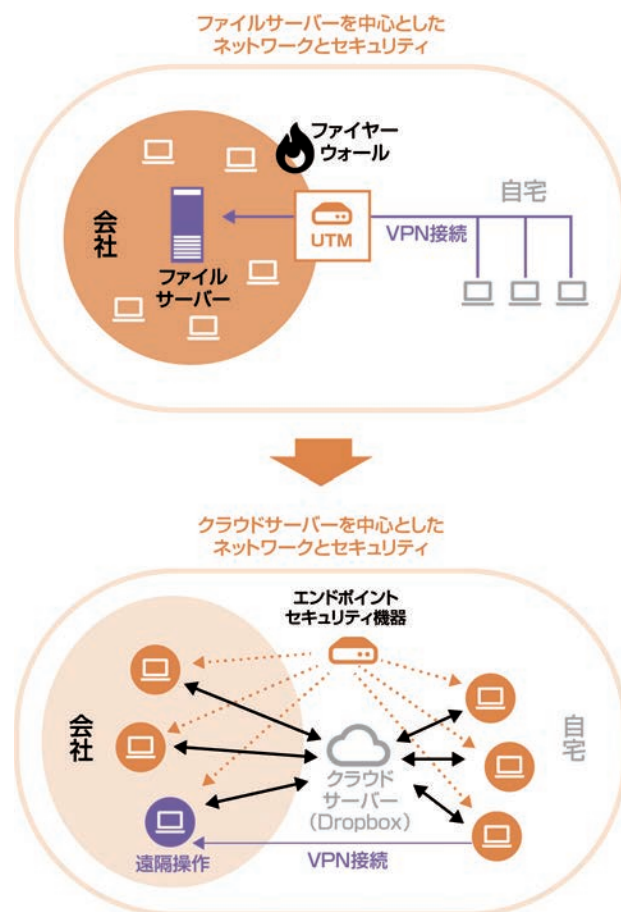
ファイルサーバーの完全クラウド化

こうなってくると、会社の収納棚を占領しているサーバー機器は場所を食うだけの存在となり、すべての社内のファイルをクラウドに移動すればいいのではという発想にいきつきます。そこで次の課題となるのがDropbox全体の容量制限です。ファイルサーバーの容量は4TB(4000GB)。Dropboxの無料版は2GB、有料(個人向け)プランで最大3TB(3000GB)なのですべてを保存することはできません。そこで5TBあるチーム向けのビジネスプランの導入を決めました。

チーム向けのプランでは、フォルダごとにアクセスできるスタッフの権限を分けることができ、ファイルサーバーと同じように運用が可能です。これでこれまでと変わらない機能で、これまで以上にスピーディーになり物理的サーバーから解放されることができました。

テレワークのセキュリティ対策

コロナ前は、UTM装置を使い社内ネットワークに対してファイアーウォールで保護し外部からの攻撃を防いでいました。しかしPCが社外にあるテレワーク環境ではアンチウィルスソフトだけでは不十分なため、セキュリティ対策のシステムも変更しました。社内ネットワークに対してではなくスタッフのPC1台ずつに対策を施すエンド



ポイントセキュリティ装置を導入することにしました。

またWebサイト制作を行う当社では、さらに厳しさを求められる案件があります。会社の固定IPアドレスからしかアクセスを受け付けないFTPサーバーもあり、その場合は自宅からVPN接続で会社のPCに入り、遠隔で会社のPCを操作するといった方法をとっています。もし会社に人がいたら、誰もいないのにパソコン画面が動いているといった異様な光景を目にすることになるのですが、これにより高いセキュリティに対する対応も可能になりました。

これらの大幅なシステム変更により、これまで月7万円ほど支払っていたサーバー関連のリース費用も、Dropboxの10名分の費用を入れても約半額程度に下がりました。

コロナがもたらしたもの

コロナによってもたらされたデジタル革命という副産物。一見災いに見える出来事もそれに対応する柔軟さと、乗り越える知恵と工夫があれば、それ以前よりも進化した姿になれる。この3年を振り返りそう確信します。そして同時にデジタルには置き換えることができないものも明確になりました。会って話をする楽しさや、同じ空気の中で感じる共感、そこに刻まれる絆はリアルな体験には到底かないません。増えた選択肢を適切に使い分け、会社にとっても労働者にとっても幸せな働き方ができること自体が進化なのかもしれません。

出口道生氏に聞く

日常や体験、現代社会を
デザインの視点で考える

今回お話をうかがったのはソニーのプロダクトデザイナー出口道生さん。ソニーグループのデザイン部門であるクリエイティブセンターに所属し、オーディオ機器など数多くの商品を手掛けておられます。プロダクトデザインのプロセスや取り組み方についてうかがいました。

——プロダクトデザイナーになられた経緯と、これまでデザインされてきた商品について教えてください。

大学ではプロダクトデザインを学び、新卒でソニーに入社しました。ハイテクなものが好きでしたし、当時いろいろなメーカーがさまざまな電化製品をつくっていた中でもソニーのデザインがいちばん好きだったので志望しました。

入社から最初の10年、1990年代はウォークマンなどパーソナルオーディオをがむしゃらにデザインしました。商品の数も多かったので、いつも仕事を抱えているような状態でした。その後プロジェクトを企画する部署を経て、業務用のビデオカメラ、USBメモリやプロジェクター、スピーカーなどをデザインしています。プロダクト以外にも、展示会のブースデザインなどを行うこともあります。

——どのような体制でプロジェクトを進めるのですか。

通常のプロジェクトは、デザイン、設計(メカ・電気)、商品企画の3部門がチームで手掛けます。デザインは1機種につき1名が担当し、基本的にアイデアから製品が仕上がるまで担当者が責任をもって最後までまとめるという企業文化があります。最近はプロジェクト自体がいろいろな商品と繋がっているものも多く、デザイナー何人かがグループで取り組むものも増えています。

クリエイティブセンターにはプロダクトデザイナー以外に、音やカラーマテリアルのデザイナーなど多岐にわたる専門性をもつデザイナーが所属し、その中でカテゴリーごとのチームに分かれます。ジョブローテーションを行うことで、さまざまな商品デザインを経験して精通できるようにしています。

——ひとつの商品をデザインするのにどのくらいの期間が掛かるのでしょうか。

製品によって異なり、短いものとひとつのデザインを2、3ヵ月で仕上げていくのですが、近作のソニー独自の立体音響技術を搭載したスピーカー「Home theater

system HT-A9」は、話が来てから最終のモックアップによるデザイン承認までもう少し長く掛かりました。もちろんその前に技術的な基礎研究やいろいろな検証があり、デザイン側もそれを受けて形を提案していきます。

この商品は4本のスピーカーを部屋に置くシステムで、物量感や技術的な面を工夫して部屋に馴染むようにデザインしていきました。テレビは今すごく大画面になっていますが、正直音がそこについていていません。良い音を出せるのに、それをどのようにテレビと一緒に体験してもらうかが課題でした。そこで、自宅で気楽に立体音響を楽しむことをコンセプトに、この円筒形のスピーカーができました。

私は外側の形をつくり、音響担当者とメカ設計者の3者それぞれが認めるデザインになるまで意見を出し合いました。3者とも個性があって意見がぶつかりますが、良いものをつくろうという心意気は同じなので、意味のあるディベートができていますし、デザインの美的センスはかなり一致しています。



ホームシアターシステム
「Home theater system HT-A9」

——先に商品の技術的な要素があった上で、外装をデザインすることが多いのでしょうか。

ケースバイケースですね。もちろんそのような時もあるけれど、デザイン側がこういうものがあつたほうが良いと提案してそれが商品になるケースもあります。

例えば、ソニーのUSBメモリはキャップレスでシリーズ化しようというデザインからの提案に、設計と企画が賛同してくれて商品のラインナップをつくることができました。スライドで出すタイプのUSBメモリ「POCKET BIT」は、デザインは私のアイデアですが、それを設計側がシンプルな構造に直して量産を可能にしてくれました。



USB メモリー
「POCKET BIT USM-L」

デザインの役割は形をつくるだけでなく、商品のストーリーや構造に踏み込んで操作の作法を考えることも含まれています。どういう形が使い心地がいいのか、カチカチという音も、音が鳴るものを集めてどんな音がいいか共有していきました。また、カセットの時代、ウォークマンは薄型でサイズも小さくなりましたが、デザイナーが持ち運びのスタイルとして小さいものを提案していなかったらあのような進化はなかったでしょう。使う時のことを考えるのが作り手の腕の見せ所だと思いますし、それにどこまで気づくことができるかが大事です。

また、ソニーではデザイン会議というものがある。部内にあり、コンセプトデザイン会議とモックアップができた時の2段階で製品化の審議をします。入社1年目でも20年目でも変わらずその審議の場で自分のデザインしたものを説明します。ここで非常に細かくチェックを行うことで、商品のソニーらしさが守られているのでしょう。また、社内全体でクリエイティブセンターの意見を重要視してくれているので、デザインが最後までコントロールできているのだと思います。

——時代の変化とともにプロダクトのデザインも変化していると感じますか。またデザインする上で意識していることを教えてください。

デザインの役割が変化してきているように感じています。1990年代の頃は店頭に並んだ時に他と違うことが重要で、それが短いサイクルで入れ替わるような状況でした。最近はそういうことではものは売れないですし、お客様もおそらくそれを求めているとは思いません。実際にそのものを使ってどうするかというところが非常に重要になってきていて、ものの形より、ものの本質的な価値を見られているような気がします。ですから、デザインは余計なものではなくなるべく取り除いたシンプルなものにしたいと思っています。

商品は、企画や要望を受けてそのまま形にするわけではなく、「だったらこうしたほうがいいんじゃない？」と考えるため、出てきたデザインが少し斜め上にいってしまいうこともよくあります。その案がそのまま商品になることもボツになることもあるのですが、提案する側としてはそれくらい飛躍させないと頭を使ったことにならないような気がしています。

——ご自宅の家づくりに関わったそうですが、プロダクトと建築の違いをどう感じましたか。

関わる人も扱う材料も違うので、テクニカルな面は大きく異なると思うのですが、デザインでいうと私は本質的にどちらも同じだと思っています。プロダクトデザイナーのキャリアを進む中でその思いが大きくなり、無性に実践したくなって自邸の構想に向かいました。私はプロダクトの延長として家を捉えていて、当初は自分でデザインして知り合いの建築家に頼んで建ててもらおうつもりでしたが、自分の思っていたアイデアが世の中にもう出てきてしまっていて、もっと完成度の高い家の実現に目標が変化して建築家の有馬裕之さんに設計を依頼しました。2005年に竣工して今18年目ですが、手を入れながら今でも快適に暮らしています。デザイナーは想像を越えたものをデザインすべきというのは、有馬さんとの家づくりでも勉強になりました。

——仕事以外の時間もデザインについて考えることはありますか。また意識して出掛ける場所がありますか。

仕事を家に持ち帰ることは極力避けていますが、考えるという意味では担当案件のことにかかわらず、日常や体験したことをデザインの視点で考える癖があります。日常や現在の社会をしっかりと見ることはデザイナーとしてとても大事なことだと思っています。そうでないとデザインが独りよがりなものになってしまう恐れがあります。面白い建物ができるとすぐに見に行きますし、流行のスポットにも出掛けます。知らないことはないようにしておこうという意識が強いですね。

最近ソロキャンプにハマっていて、都会から離れて自然の中にいると、また文明が違って見えるので、そういう距離感や関係も面白いと感じています。でも結局それは山の中で文明を見ているということなので、結局どこにいても何かしら考えているということなのでしょう。

やはり形をつくるのが好きで、未来のことを考えたものづくりが好きなので、そういうものに関わることができるこの仕事を、これからも楽しみたいです。

——貴重なお話をいただきありがとうございました。

インタビュー：2023年1月12日 ソニー本社

聞き手：佐久間達也・望月厚司・関本竜太・会田友朗
（『Bulletin』編集WG）

PROFILE

出口道生（でぐち みちお）

プロダクトデザイナー

1966年生まれ。大学でプロダクトデザインを学んだ後、1989年ソニーグループ株式会社入社。現在、同社クリエイティブセンター所属。

日常生活からみる アブダビという都市



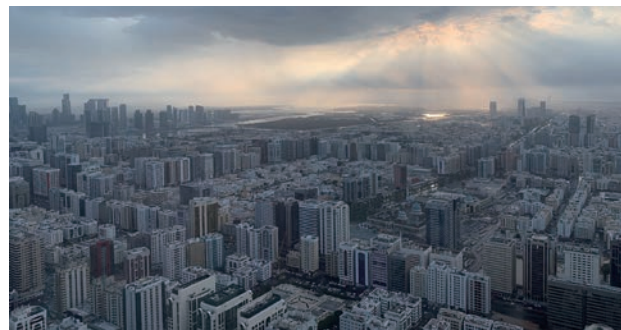
横松宗彦

朝は6時に起床する。12月のアブダビはまだ暗い。やがて東の地平線から朝日が昇り、朝食を食べる頃には、街区の輪郭が次第に浮かび上がり、ビル群の彩度が増していく。地上250mのリビングルームからは、アブダビ市街の都市のつくられ方がよくわかる。

私の住む中心市街地は、1960年代後半からの都市計画をベースにしており、コーニッシュと呼ばれるアブダビ半島西端の海岸線に直行するグリッドで街区が分割されている。現在旧市街地の街区を構成する大半の建物は、80年代に建てられた最高20階建ての鉄筋コンクリート造のビルで、これらが街路のエレベーションを形成している。それぞれの街区にはモスクが1つずつ配置され、1日5回の礼拝時間に利用される。上から見ると、モスクはメッカの方角に振られており、街区グリッドとのずれによって生じた三角形の空間は、単に駐車場やアクセス動線として利用されるだけでなく、植栽することで都市内のアメニティに貢献し、コミュニティを助ける街区内のプラザ的な役割を持っているのは興味深い。

アブダビは年代によって都市計画の規制が更新されるため、市街地内の建物はその高さによって建設された年代が想定できる。20階から30階建ての建物は90年代になってからのもので、ファサードもそれまでのコンクリートのものから、アルミの外装材あるいはカーテンウォールが主流となる。2000年代からは、200m超の超高層も建てられ、旧市街地にも私の住む300mを超えるタワーを含め、ところどころに都市内のランドマークが形成されている。

現在のアブダビひいてはUAEは、人口構成の2割ほどにしか満たないエミラティと呼ばれる国民と、その他8割を占める外国籍を持つエクスパットで構成されている(エクスパットとは狭義には外国企業に所属するいわゆる駐在員を意味するが、ここでは広義に国外から来た外国籍を持つものを意味するものとする)。外国籍を持つ者のほとんどは、労働ビザを取得し、一定期間UAEに滞在し本国に帰還する。これは、1950年代の石油の発掘以来、その収益を国の基盤整備に投入するために、国外から知識、技術、労働力を招致していることに起因す



超高層タワーから見るアブダビ中心市街地

る。エクスパットは、工事現場やプラント、工場で働く出稼ぎ労働者から、サービス販売業に従事する者、技術系、教育系、金融系、医療系等、全ての労働の種類あるいは階層を支えている。そして、このエクスパットの住む都市内は職種による棲み分けが明確に認識できる。旧市街地の中高層のビルは、政府の支援を受けた国民の投資先として、高所得のエクスパットの居住を想定とした賃貸目的に建設されたというのが、40年～50年経った現在は老朽化が進み、低中所得層の人々がフラットをシェアして暮らしている。通常1階と2階は各種店舗に充てられ、周辺住民の需要を満たし、昼夜を問わず活気を呈している。一方で、超高層のタワーには、外部から遮断された完結した生活が期待されている。共有空間のアメニティの充実が求められ、ジムやスイミングプールをデフォルトとして、シアター、テニスコート、子どものプレイグランド等も備える。住民はエレベーターで下階まで下りて、外に一步も出ることなく直結したショッピングモールで買い物を済ませる。この利便性に対する価値は、夏の気温が摂氏40度を超える過酷な環境下で絶対的なものとして存在する。

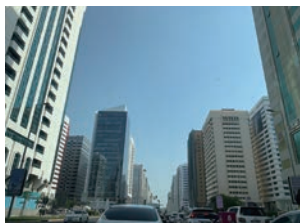
アブダビは湿度に加えて、大気中の砂の量が視界を変える。旧市街地は四方を海と島に囲まれ、空気が澄んでいる日は、アブダビ島の遥か向こうのアブダビ国際空港の近くまで視界が及ぶ。私が16年前に現職で初めて担当した中東のプロジェクトは、空港の西側に位置するアルラハ地区の中心部に人工の湾を形成し、そこに半島状に突き出る金融センターを建てるものだったが、造成工事の段階で、2008年の金融危機のあおりを受け頓挫して

しまった。現在も設計した建物の有機的な形状が半島の輪郭として残っているが、敷地は分割され数棟の建物が計画されているようである。

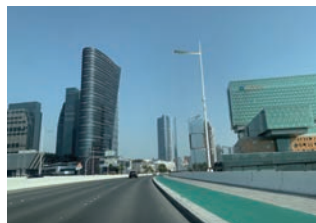
朝食と身支度を終え、地下4階の駐車場まで降りる。朝のこの時間は秒速8mの高速エレベーターの恩恵を受けることはできない。地上につくまでの間、ドアは何度も開き、出勤する会社員、異なるエンブレムを付けた制服を着た子どもたちが乗ってくる。レジデンスのエントランスにはそれぞれの学校のスクールバスが待機している。私は車で娘を送り、そのまま勤務地に向かうことにしている。

地上に出たあと車は旧市街のビルの間を走る。片側3車線の道路は通勤の車で込み合いひっきりなしに車線変更が行われる。市内では、唯一の公共交通であるバスが利用可能であるが、利用する層は限られている。その理由として、私を含めてエクスパットは日常的に、都市内に広く分散された目的地の間を移動しながら生活しており、厳しい暑さのなか自家用車の利便性に頼らざるを得ない点がある。加えてエミラティのプライバシーを重んじる文化的背景から、鉄道を含めたその他の公共交通の開発の優先度は低いという。

旧市街を抜けアブダビ島とアルマリヤ島を繋ぐ橋に差し掛かると、その先に巨大なガラス張りの建物が見えてくる。これはアメリカ系の大病院で、最新医療設備と高級ホテルのような内部空間を備え、政府のメディカルツーリズムの一翼を担っている。箱をずらしながら積み重ねたシンプルで大胆なボリュームの構成は、緑色のガラスのダブルスキンで覆われ、内海に面して反対側の市街地に、先端医療の存在感を強くアピールしている。道路を挟んで病院の向かいには、ホテル、オフィスおよびショッピングモールで構成された複合エリアがあり、フリーゾーンとして、海外資本のビジネスを積極的に誘致している。



アブダビ旧市街



アルマリヤ島に向かう橋

娘の通う英国系のインターナショナルスクールは、アルマリヤ島をさらに超えた、アルリーム島の中心部に位置している。この学校は、幼稚園から高等学校まで、生徒数2,000名を超えるキャパシティをもち、現在通っている生徒の国籍数は100近くに及ぶ。学校は、中世から続く本国英国のボーディングスクールの名を冠し、提携校として本国からのコンサルティングを受けつつも、資



フォスター・アンド・パートナーズによる
Zayed National Museum
完成イメージ

本は完全に分離されている。現在アブダビには、200近くのインターナショナルスクールがあり、エクスパットとエミラティの子どもたちが混ざって教育を受けている。

娘を教室まで送り届けた後は、勤務地であるサディヤット島に向かう。サディヤット島は政府によって、文化観光の拠点地域として開発が進められており、有名建築家による大規模博物館、美術館が徒歩圏内に位置している。2017年にオープンし、円形の巨大キャノピーで建築界で話題となったジャン・ヌーヴェル設計のルーブル美術館をはじめ、2025年竣工予定のメカノー設計の自然史博物館、デイビッド・アジャイのAbrahamic Family Houseは同じ道路を挟んで建つことになる。その道路の突き当たりには建設中のフランク・ゲーリーのグッゲンハイム美術館の敷地が海に張り出している。

弊社フォスター・アンド・パートナーズが設計監理する国立博物館Zayed National Museumは島の中心に位置する。博物館はUAE建国の父であるSheikh Zayedの名を冠し、UAEの歴史の変遷とSheikh Zayedの人生と遺産をテーマとしている。私は5年前に本社から派遣され、現在リードアーキテクトとして現場の建築チームを任されている。プロジェクトは2007年のコンペで受注し、私はチームのメンバーとして初期段階から設計に取り組んできた。以降プロジェクトは止まったり動いたりを繰り返しながら、2018年によく工事が本格的に再開した。現在、スチールでできた地上120mのソーラーチムニーである5棟の「ウイング」が組み上がり、ようやく建物のシルエットが見え始めている。

アブダビの都市化の歴史は50年と非常に浅いが、1950年代の石油の発掘を契機として、その収益を戦略的に投資し、国外から専門的な知識・技術を吸収し、労働力を呼び込み、柔軟に海外の事例を参考にしながら都市環境を整え、石油依存経済を克服すべく急速に成長してきた背景がある。今回は、私の日常生活のルーティンから垣間見えるその断面を、私なりの視点から紹介させていただいた。

横松宗彦（よこまつ むねひこ）

1998年 立命館大学理工学部土木工学科卒業。2000年 立命館大学理工学研究科環境社会学修士。2006年 英国 ロンドン大学バートレット校修士（建築修士（UCL Bartlett School of Architecture））。2007年から現在 フォスター・アンド・パートナーズ（Foster+Partners）。一級建築士

日本橋、銀座エリアの 景観・歴史・環境遺産



中央地域会代表
小田恵介

2015年開催の第24回保存問題東京大会時に、東京14地域会の協力のもと「未来へ継承したい環境・景観・建造物・建築物」をテーマにまとめ、大会シンポジウムで各地域会から発表されました。その時の資料をベースに「未来へ継承したい風景」として連載しています。

中央区の日本橋、銀座エリアは、江戸幕府開幕直後に50年余りにわたって江戸・前島の延長として埋め立てられたエリアで、江戸の下町の端緒となる近世の歴史においても重要なエリアです。この稿の依頼を受け、改めてこのエリアを巡り、数ある名所の中から「未来に継承したい風景」にふさわしい名所を厳選しました。いつまでも次世代に受け継がれていくことを願っています。

日本橋

重要文化財

江戸時代の五街道の起点で、現在も日本国道路元標が設置されている。明治以降も国立第一銀行、日本銀行本館などがある金融街として発展した。1603(慶長8)年に木造の太鼓橋として誕生し、現在の石造二重アーチは1911(明治44)年に完成。米元晋一が設計し、妻木頼黄^{よりなか}が彫刻、外灯などの装飾を担当。



日本橋(日本橋)

日本橋三越本店・三井本館

重要文化財

江戸時代初期の呉服商「越後屋」が前身。現在の建物は、1911年に横河工務所の設計施工で竣工。建築構造は当時最新の鉄骨カーテンウォールのルネッサンス様式で、東洋一の規模ともいわれた。旧三井本館は、1902年に横河民輔の設計で完成し、1923年の関東大震災でも被害は皆無だったが、現在の三井本館は、三井合名のさらに強固な本社屋建設計画として1929年に竣工。米国のトロブリッジ・アンド・リヴィングストン事務所の設計の新古典主義様式の建築。



日本橋三越本店(日本橋室町)

日本橋高島屋本店

重要文化財

1933(昭和8)年に日本生命本館として建設され、高島屋がテナントで入居。設計は高橋貞太郎、施工は大林組。巨大な百貨店建築として設計競技が行われた。全館冷暖房完備の建物は当時の最先端だった。近年改修工事が行われ、隣接して日本橋高島屋三井ビルディングの再開発ビルが建設され、一大都市型ショッピングセンターに生まれ変わった。

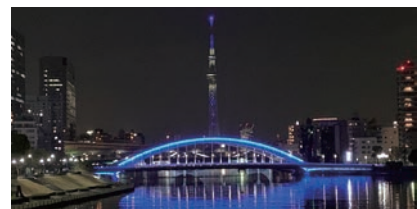


日本橋高島屋本店(日本橋)

永代橋

重要文化財

江戸時代から隅田川に架かる橋。関東大震災で焼け落ちた後、現在の橋は1923(大正12)年に着工し、1926年に竣工。2020年にライトアップがリニューアルされた。写真は中央区の中央大橋から撮影したもの。東京スカイツリーと美しくライトアップされた永代橋を撮影できる人気のスポットになっている。



永代橋(西岸は中央区新川、東岸は江東区佐賀)

聖路加国際病院

東京都指定歴史的建造物

1901(明治34)年に、米国聖公会の宣教医師ルドルフ・トイスラーが設立。戦前の旧病棟の建設には、多額の資金を下賜されるなど皇室との関わりも深く、日米財界からの資金援助も受けた。近年、第二街区の新病院棟(1992年竣工)、第三街区の聖路加タワー(1994年竣工)と共にエリア全体として再開発された。

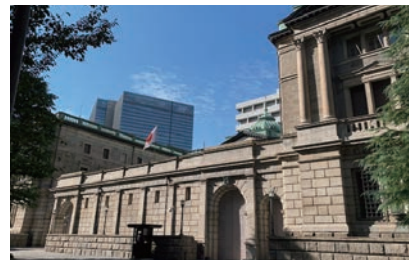


聖路加国際病院(明石町)

日本銀行本館

重要文化財

敷地は、もともと金座の座長を務めた後藤家の屋敷跡。設計は辰野金吾。国立ベルギー銀行を参考に設計され、1896(明治29)年に竣工。当該地は地盤が悪く、無数の松杭の上に厚さ2mものマットスラブが採用された。工事難航し、高橋是清に支援を求め、濃尾地震の教訓を参考にして上部構造の軽量化が計られた。



日本銀行本館(日本橋本石町)

奥野ビル

旧館は1932(昭和7)年、新館は1934(昭和9)年竣工、築90年の旧銀座アパートメント。関東大震災後に建設された同潤会アパートの設計者川元良一の設計。建設当初は、店舗が併設され、スチーム暖房、共同浴場、屋上の洗濯場があり、おそらく住宅としては初めてエレベーターが採用されている。現在はアート系店舗など20店舗が入居するレトロな現役の近代建築。

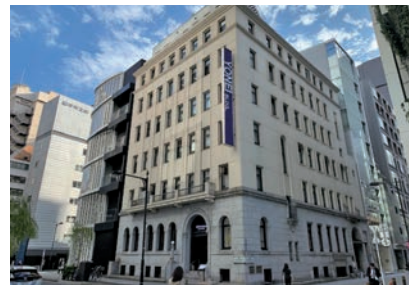


奥野ビル(銀座)

ヨネイビル

東京都指定歴史的建造物

1930(昭和5)年竣工の旧米井商店。設計は森山松之助、施工は清水組(現・清水建設)。中世ロマネスク風の壮麗・瀟洒な建物で、1階の螺旋模様のアーチ窓が特徴。2階以上はテラコッタ・タイルで隙間なく覆われていたが、1984(昭和59)年に改修され、残念ながら当時の外観は見られなくなった。銀座柳通りにあり昭和初期の風情を伝えている。



ヨネイビル(銀座)

和光本館・旧服部時計店ビル

近代化産業遺産

東京都のランドマーク

現在のビルは関東大震災後の1932(昭和7)年に、服部時計店の二代目のビルとして竣工。ウェストミンスターを模した鐘を奏でる時計塔は銀座のランドマークとなっている。ネオルネッサンス様式の渡辺仁の設計。終戦直後にはGHQに接収された。著名人が多く訪れる高級専門店としても有名。



和光本館(銀座)

歌舞伎座

国登録有形文化財

1889(明治22)年の開業以来、火災や戦災により5度にわたって改築されている。大正時代から松竹が直営。2014年にオフィスビルを併設したビルとして、都市再生特区として再開発された。地下には「木挽町広場」、高層オフィスビルの「歌舞伎座タワー」には「歌舞伎ギャラリー」「屋上庭園」が併設され賑わっている。



歌舞伎座(銀座)

築地本願寺

重要文化財

浄土真宗本願寺派の寺院で西本願寺の直轄寺院。江戸時代の1617年の浅草御門南の横山町の西本願寺別院が起源。現在の本堂は、関東大震災後の1934(昭和9)年に竣工。古代インド様式をモチーフにした伊東忠太の設計、施工は松井組(現・松井建設)で、その荘厳な外観は築地の顔となっている。2017年には、カフェのあるインフォメーションセンター、地下の合葬墓が増築された。



築地本願寺(築地)

泰明小学校

泰明小学校は、1928(昭和3)年着工、1929年竣工。中央区に現存する、関東大震災後に建設された震災復興小学校で、数少ない貴重な建物。設計は当時の東京市の設計主任技師の原田俊之助。敷地上の制約から東西に細長い平面計画で、バルコニーや庇を設け、3階窓下に胴蛇腹を付けその上下を分節している。3階窓上部がアーチ形で体育館の平面が円弧を描き、典型的な表現主義の建築である。



泰明小学校(銀座)

城北エリア(KNIT)に広がる多様な風景

—北(K)・練馬(N)・板橋(I)・豊島(T)の

みどり・営み・歴史を継承する—



城北地域会代表
鈴木和貴

2015年開催の第24回保存問題東京大会時に、東京14地域会の協力のもと「未来へ継承したい環境・景観・建造物・建築物」をテーマにまとめ、大会シンポジウムで各地域会から発表されました。その時の資料をベースに「未来へ継承したい風景」として連載しています。

城北地域会を構成する板橋・北・豊島・練馬の4区には、河川や農地などの「みどり自然の景」、住まいや賑わいで「人の営みを感じる景」、建築、文化など「地域の歴史を語る景」、などが多様に展開している。その中から未来に継承したい風景、11例を紹介する。

(久間常生・鈴木和貴)

千登世橋と都電荒川線

目白通りは丘の尾根を走る東西軸で、その狭隘部を明治通り(環状5号)が開削貫通したのが昭和8(1933)年、架けられたのが千登世橋である。車社会への移行を象徴する都内最初の立体交差と言われている。都電荒川線は現在東京に残された路面電車唯一の路線だ。千歳小橋の下を通り抜け早稲田から池袋、大塚へ、終点三ノ輪を繋いでいる。車社会のあけぼのを示す美しい道路の交差と、東京の日常交通を担った路面電車最後の路線の出会いがここ千登世橋でみられる。(柴田知彦)



千登世橋と都電荒川線
(豊島区目白)



同潤会佐々木邸

日本初の公的住宅供給組織「同潤会」によるアパートは惜しまれつつ全て解体されたが、同潤会は木造一戸建て分譲住宅も500戸以上建設している。その貴重な資産である佐々木邸は、初代当主から大切に住み続けられ、子孫であられる現所有・管理者の丁寧なご尽力でオリジナルの姿を保ち続け、2010年登録有形文化財として認定された。我が国の建築文化・住生活文化の継承としてぜひ残したい風景。(久間常生)



佐々木邸(練馬区小竹町)

良好な住宅地の開発と実践

城南住宅(練馬区向山/1924年組合結成)と常盤台住宅(板橋区常盤台/1936年分譲開始)の、当時の先進的な試みは現在でも特筆すべきもの。城南住宅の共同借地の試みは居住者による住環境の維持を目的とし、常盤台住宅の分譲パンフからは多様なライフスタイルが読み取れる。ともに理想の田園住宅を目指したスタート。今、自らが街を育てる仕組みは街の魅力となって継承されている。(鈴木和貴)



城南住宅(練馬区向山)

城北地域に残る戦争遺産とその活用

加賀藩が石神井川を利用して火薬をつくろうとしたことが、明治以降の陸軍関連施設の集積へと繋がる。戦後、造兵廠(北区・板橋区)や被服廠(北区赤羽台)などの広大な軍用地や堅固な軍関連施設は払い下げられた。赤羽台団地・桐ヶ丘団地(被服廠など)は大規模団地の先駆けとして新しい使命を与えられ、中央公園文化センターや北区中央図書館(造兵廠など)は地域の核として再生された。(鈴木和貴)



中央公園文化センター／旧造兵廠本部(北区十条台)

サンシティ

城北地域の景観上の特徴である武蔵野台地の崖線。その崖線がなす斜面地に建つ14棟の集合住宅群(板橋区中台/1980年分譲開始)。居住者以外にも公開されている住宅地内の豊かな緑と起伏に富んだ景観の魅力は、居住者が中心となって活動する多様なコミュニティがあるからこそ。美しい建築やまちとは、そこに関わる人たちが主役となることが肝要を示す好例。(鈴木和貴)



サンシティ (板橋区中台)

生活に彩りを与える人々の交流の場

私たちにとって魅力的な街とは何か、という根源的な問いに適格な答えは難しい。しかし、買い物ひとつとっても「便利さ」だけでは街の魅力は語れない。さまざまな人が集い楽しむ場としての「商店街」「飲み屋街」などを街のインフラストラクチャーとしてとらえて継承していることを評価軸に据えていく必要がある。(色川善一)



赤羽のせんべろ街 (北区赤羽)

住宅地と共存する都市農業の風景

都市化により多くの農地が宅地等となり続ける一方で、新鮮農産物の供給、安らぐみどりの提供、環境保全、防災空間の確保、農業体験・交流など、都市農業の存在・多面的機能が再評価されてきている。区民農園、体験農園などでの体験・交流も一定の成果をあげる中、「農」と周辺市街地・住宅地が共存するまちづくり、都市景観のあり方は練馬区など城北地域でこれからも大切にしたいテーマである。(久間常生)



都市農地と住宅 (練馬区石神井台)

染井墓地～^{やと}谷戸川の景色

染井墓地の長池を源流とする谷戸川(暗渠)に沿う小道に接し芥川の墓がある。百年前の近代思潮：物事の道理を論理的に判断する理知を描いた作家・芥川龍之介。小学生では「蜘蛛の糸」、中学では「鼻」「杜子春」など教科書で購読。谷戸川(谷田川)の流れは藍染川となり不忍池に注いでいた。漱石「三四郎」に登場する美禰子がストレイ・シープとつぶやく川筋。(秋山信行)



慈眼寺 芥川家墓所 (豊島区巢鴨)

飛鳥山など江戸時代から続く景勝地

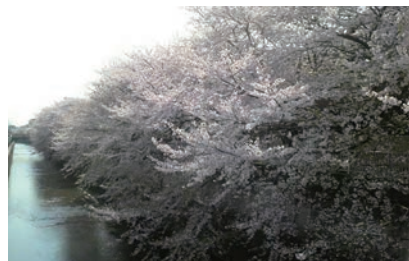
日本橋から2里、約8km弱の位置という江戸中心部から日帰り行楽の地にあったことから江戸名所圖絵などにも描かれ賑わった王子界隈の景勝地は、音無親水公園、飛鳥山公園、名主の滝公園などとして、四季折々、多くの人々が訪れ、地域のかげがえのない場として今も息づいている。(色川善一)



王子七滝の1つで唯一残る名主の滝 (北区岸町)

川の風景景観 石神井川桜など

石神井川は練馬区、板橋区、北区と城北地区を横断している。また千川上水は四区を横断する貴重な水資源であり、一部は開渠としてかつての面影をとどめているものの、現在は残念ながら暗渠となっている。石神井川沿いの春の桜の景観は、旧としまえん、城北中央公園、音無親水公園、飛鳥山公園などと連携し、素晴らしい景観を形づくっており、継承したい風景である。(南知之)



石神井川桜 (練馬区桜台)

赤塚城跡

都立赤塚公園の西端部に位置する赤塚城跡は、荒川低地に面した崖線の台地上にある。鎌倉時代、康正2(1456)年に下総国を追われた千葉実胤、自胤の兄弟は、この地形を利用して赤塚城を築き入城し、現在の和光市、さいたま市、足立区内に基盤をつくった。現在では城はなく、広場となっているが、春は桜並木、秋は紅葉に囲まれた静寂な風景を楽しむことができる。(信原利行)



赤塚城跡 (板橋区赤塚)

『人新世の「資本論」』にみる 今後の建築まちづくりの視点

—行き過ぎた資本主義の問題—



建築まちづくり委員会
まさき
小川真樹

建築まちづくり委員会では、上記テーマで話題の3書籍『人新世の「資本論」』（斎藤幸平）、『里山資本主義』（藻谷浩介）、『土地はだれのものか』（五十嵐敬喜）をメンバーで担当し、読後感をもとにディスカッションしています。建築まちづくりは公益性という意味で、利用者や住民にとって何が大切なのか、という根本的ビジョンが求められ、書籍から3回シリーズで浮き彫りにします。第1回は『人新世の「資本論」』の小川真樹氏です。（連 健夫）

「必読の書」が問いかけるもの

言わずと知れた話題の1冊。必読の書と言ってもいいだろう。2年前の本なので、読んだ人はそれぞれに解釈し考えたのであろうが、似た立ち位置で活動する人たちに対して自分の考えを語るとは、頭の中が整理されると同時に実務との関係を考察できる意味でも有意義だ。

著者の斎藤幸平氏はマルクスの研究者であり、晩年のマルクスの思想に現代の諸問題を解く鍵がある、とする論が本書の基調になっている。であるが故に「資本論」なのであるが、実は、この本のメインテーマは「人間の幸福とは何か。そのために社会はどうあるべきか。」という普遍的な問いかけにある。そして著者はこう答える。『人間の幸福とは持続可能な生き甲斐のある生活にあり、そのための社会構造は「脱成長コミュニズム」である』と。脱成長、つまり成長とは無縁の価値観だ。

SDGsが、成長が前提の「開発」目標であることはよく批判され、私自身も大いに疑問であるが、それとは異なる方向と言える。と同時に、こうした議論ではそのあたりに疑義が生じることもなる。この日の議論で出た「開発途上の地域はどうなるのか？」という疑問はその典型だろう。つまり、そう簡単ではないのだ。本書でも魔法のような解決策を差し示してはおらず、いくつかの好事例と3.5%の人間が本気で動けば社会は変わる、という誰かの研究結果を提示しているのみだ。

「コミュニティ」「コミュニズム」「コモン」

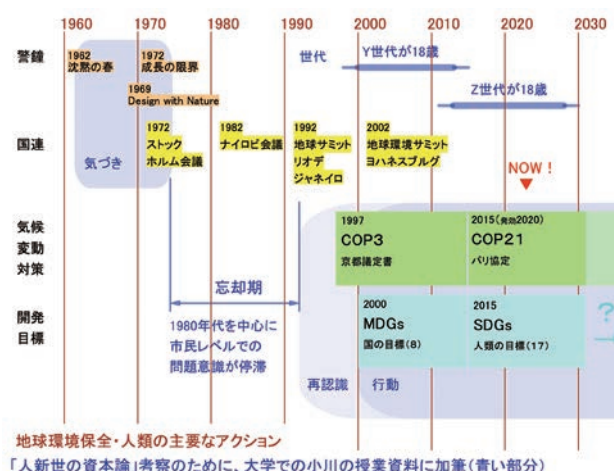
私は、コミュニティという言葉には一抹の偽善や陳腐さを感じている、これは同世代に共通のものかもしれない。それは作家性や先進性と対極にある印象の言葉で、時として資本の隠れ蓑のように使われてきた。しかし、本書の「脱成長コミュニズム」には、隠れ蓑にできるような生易しさが無い。金銭的な価値ではない「使用価値」を基準とする価値観が根底にあるからで、使用者自らがそれを（つまりコモンを）管理することが必須条件となっているのだ。事例として最も印象に残ったのは「コペンハーゲンの公共の果樹」であるが、このあたりは「まち

づくり」の実際において大いに参考になる。つまり管理主体を使用者側に持ってくるということだ。

いかに行動すべきなのか

とは言え、あちこちで「公共の果樹」をやっても社会は変わらないだろう、という疑念が再び頭をもたげる。人間の欲望を燃料にして真っ直ぐに走り続ける現代の資本主義は、本当に進路変更が可能なのだろうか？ 実は最近になって可能なような気がしてきたので、最後にそのことを書こうと思う。

私は美大で「サステナブルデザイン論」という講義を持っているが、少し前から学生の反応や物の見方が変化しているのを感じている。図は、その講義で配布している資料に今回の議論用に加筆したもので、これを見ると1970年代後半～1990年代前半にかけて市民レベルでの地球環境忘却期が明らかにある。それは、いま先頭に立っている世代が社会に出た時代でもあるのだ。つまり私たちは欲望型資本主義が体に染み込んでいて容易に抜けない世代と言える。対して、本著者を含むY世代はCOP3とMDGs、その下のZ世代はCOP21とSDGsが、社会に出たところとそれぞれ重なる。つまり彼らは資本主義に失望するところからスタートしていて、価値観がもともと違うのだ。だから私は、自分が今行動すべきことはこれらの若い世代が動きやすくなることだと思っている。



地球環境保全・人類の主要なアクション
『人新世の資本論』考察のために、大学での小川の授業資料に加筆（青い部分）

建築士の監理義務



山崎哲法律事務所
弁護士
安藤 亮

監理者は紛争に巻き込まれることが多い

建物に瑕疵が生じ紛争になった場合、施主は、まず施工者の責任を追及しようとしませんが、併せて、監理者である建築士に対しても監理義務違反を理由として損害賠償を請求することが多いと思われます。また、実際には、瑕疵が発生しているから監理者も一緒に訴えておこうというような、いわば結果責任を問うような請求をする例も少なくありません。

そこで、本稿では、建築士の監理義務について掘り下げていこうと思います。

監理業務とは

建築士法上、工事監理業務について、「その者の責任において、工事を設計図書と照合し、それが設計図書のとおりに実施されているかいないかを確認すること」と規定されています(同法2条8項)。このほか、同法18条1項、同条3項、同法20条3項等にも工事監理に関する規定があります。これらの規定を受け、国土交通省告示98号において、監理者の業務として、「工事監理に関する標準業務」「その他の標準業務」「標準外の業務」を挙げています。

「標準業務」として挙げられているものは、工事と設計図書との照合及び確認、工事と設計図書との照合及び確認の結果報告等、建築士法2条8項記載の業務が中心ですが、「その他の標準業務」「標準外の業務」に挙げられている業務は、同条項記載されている以外のものも含んでおり、業務範囲は広いと言えます。

監理業務の方法・内容を明確にする

このように、監理業務の範囲は広いことから、監理契約で監理業務の内容を特定していなかった場合、ひとたび瑕疵に関する紛争が発生すると、冒頭で述べたように監理義務違反を問われるという事態になりかねません。

裁判では、合理的な方法による確認を怠った場合は監理義務違反があったとされます。このような事態を避けるためには、契約書において監理業務の方法・内容を特定し、明記しておく必要があります。

具体的には、監理の方法を特定する(常駐監理か重点監理か、立会確認か書類確認か、など)、確認対象・項

目の特定する、監理の頻度を特定する(どの段階で何回監理を行うか)、などが考えられます。また、施主に対し、国土交通省作成の「工事監理ガイドライン」を交付し、内容を説明したうえで、契約書に「工事監理ガイドラインの具体的な確認方法による」と明示するという方法も、監理業務の特定のうえで有用ではないかと思います。監理業務の内容を施主に対して事前に丁寧に説明し、了解を得て契約書に明記しておくことで、監理義務違反をめぐる紛争を相当程度未然に防ぐことができるのではないかと思います。

裁判上、監理義務違反が認められたものとしては、地下外壁防水工事等の未施工が問題となった事例、建物基礎の鉄筋のかぶり厚が問題となった事例、建物の基礎配筋の欠陥が問題となった事例などがあります。

名義貸しは違法

監理契約を締結することなく確認申請書の工事監理者欄に監理者として名義を記載する行為(名義貸し)を行った場合、不法行為責任を問われる可能性があります。

最高裁判所平成15年11月14日判決は、「一級建築士又は二級建築士による設計及び工事監理が必要とされる建物の建築につき一級建築士が建築確認申請手続を代行した場合において、建築主との間で工事監理契約が締結されておらず、将来締結されるか否かも未定であるにもかかわらず、当該一級建築士が、建築主の求めに応じて建築確認申請書に自己が工事監理を行う旨の実体に沿わない記載をし、工事監理を行わないことが明確になった段階でも、建築主に工事監理者の変更の届出をさせる等の適切な措置を執らずに放置したこと、そのため、実質上、工事監理者がいない状態で建築された当該建物が重大な瑕疵のある建築物となったことなど判示の事情の下においては、当該一級建築士の上記行為は、建築士法三条の二及び建築基準法…各規定等による規制の実効性を失わせる行為をしたものとして当該建物を購入した者に対する不法行為となる」と判示しています。

そのため、名義貸しを行うことのないように気を付けていただきたいと思います。

職能こそ建築家の本分



益子一彦

気付けば建築に関わるキャリアも40年になろうとしている。建築の設計の仕事を長く続けること自体にそれほど価値はない。キャリアの長さが優れた建築を生み出せる基礎とはならないからだ。それでも、途中で挫折することなく続けてこられたことは、幸運というほかはない。

40年ほど昔、水戸にある三上清一が主宰する三上建築事務所に入所した。その際の面接で「将来どうになりたいか？」と質問を受けた。生意気盛りだった僕は、「有名になりたい」と応えた。自分が発したその言葉が、僕の建築家人生の拠所となった。

当時の設計事務所では、所長は師匠、所員は弟子、先輩は兄弟子、新人は丁稚であった。三上建築事務所はその最たるものだっただろう。新人は朝早く出勤して、事務所を掃除し、先輩たちのお茶汲みをする。午後3時にはまた先輩のお茶を汲み、所長の車を洗車して自宅に届ける。雑用に翻弄され、机に向かう頃には陽も暮れる。その時刻になると現場に出ていた先輩たちも帰着してきて、あちこち怒号が飛び交う。夜が更けても先輩よりは先には帰れず、午前様となる。偉ぶる先輩たちが描いている図面を覗いても、学生時代に夢見た建築とは程遠い。丁稚生活がつくづく嫌になり、大学の先輩に相談する。返ってきた応えも甘くはなかった。「石の上にも3年っていうんだ」。止む無く助言を素直に受け入れ、我武者羅に励み、同僚の倍速で仕事をこなした。それを先輩からは生意気と言われた。得られるもののない先輩に敬語を使う気になれなかったのだから、今となれば合点もいく。

先輩は共同していた内井事務所や磯崎アトリエへの出向の機会を得る一方で、僕は常に留守居役だった。そこで三上からデザインを学んだ覚えはない。ただ、些細な振舞いで怒鳴られた（それは職能という建築家としての姿勢の躰であったことを後で得心する）。デザインは見様見真似だった。そして、ひとつ竣工させるたびに課題が積み重なる。そして、自分の仕事と雑誌の中の建築の差異を知るために、建築を見て回り、その理由を自分なりに解いていった。夢中で走るうちに3年をとうに過ぎ、三上の意見は聞き入れながらも自らの意思で設計するようになり、雑誌にも採り上げられるようになってい

た。それでも、仕舞いの綺麗な先輩と同じことをしては勝ち目はないことと田舎に居ることに焦燥を抱いていた。

そんな時期に欧州建築視察に参加した。個人建築家・大手設計事務所やゼネコン設計部の相応の立場の人たちとヨーロッパの最新建築を観て廻った。見るもの全てが刺激的で、乾いていた自分の身体に染み渡る感覚を覚えながら、多くの人たちと交流する中である種の閃きを感じた。「綺麗なものだけが建築じゃない」「俺もやれるんじゃないか」。自分の生きる道が見えたような気がした。コールハースはロッテルダム、ヘルツォークはバーゼル、ゲーリーはサンタモニカに居て世界で建築を創っている。「建築家は何処に居るかが問題ではない。何を創るかが重要なのだ」と遅まきながら建築家の自分を自覚した。同時に万能と錯覚し、現場では図面にどう描いてであろうと、今自分が考えていることを最優先することこそが正しい行為だと確信していた。けれども、その態度が大将の立場の自覚を与えてくれた。

1999年自分で担当した図書館建築の過程から完成までを1冊の本にまとめた。設計事務所の担当者にあるまじき行為であったが、三上はそれを容認してくれた。翌年2000年に副所長の役を与えられ、2005年には三上に後を託され所長となった（同じ頃三上清一はJIAの名誉会員に推挙された）。所長就任の期に当時の新建築の会長の吉田氏に挨拶に伺った際に、激辛の励ましをいただいた。「トップは孤独だ。君にその覚悟はあるか？」

2007年三上清一が他界した。三上が居なくなって初めて吉田氏の言葉を実感した。そのときに、「世界を目指そう」と思った。然したる根拠も、当てもあるわけではなかった。もともと裕福でない事務所は低迷していたからこそ開き直すこともできた。

そして、2011年に四川省成都でのプロジェクトに迫り着く。「できる」と思うことだけが可能性をもつ。根拠のない自信が今も僕を支えている。あれから40年の歳月を経た今の自分は、果たしてあの頃思い描いた未来なのかと時々自問する。そして三上清一に言い聞かされた言葉を思い出す。「人様のために、人様のものを、人様のお金で創らせて頂く。その謙虚さこそが建築家の本分だ」。

森を次世代に



高橋正嘉

昨年2022年4月にJIAに入会しましたが、建築に対する自分のなかの意識も変化しています。そのなかのひとつに国産材とくに長野県産材をもっと活用できるような仕組みをつくれなかと、かなり漠然とですが考えるようになりました。

それまでは住宅を設計する際、材料にまで意識が向いておらず、一般的に流通している海外からの輸入木材を、構造上の強度等の問題から何も気にせず選択して使用していました。私自身が設計して住んでいる自宅も同様の意識だったので、構造材については特に気にしていませんでした。

昨今の情勢による影響で、普段見慣れていた風景が変わってきています。というのも近くの森林があつという間に伐採されてしまい、地肌がところどころ見え始めた風景を目の当たりにすることがここ2年ほどで増えました。そのことがきっかけで自分の身近にある森林がどのように利用されているかが気になるようになり、まず現状を把握しようと思い始めました。いくつか書籍を読み、なんとなくの状況は把握できるものの、ふわっとした感覚しか得られていないというのが正直なところでした。しかしながら森はすぐにはできないので、次の世代のために今すぐにでも始められることは始めていかなければと強く思うようになりました。

そこで長野県の森林の状況を一から勉強したいと思い、JIA長野県クラブの地域環境委員会に参加しました。まだ委員会での活動も十分にできていませんが、少しずつでも勉強を続け、長野県産材をより良く利用する仕組みをつくれるように活動していければと思っています。



「穂高有明の住宅」©ToLoLo studio

ひとまず自分で やってみた



熊谷善紀

松本城の東にある大正13年建造の旧医院を再生して事務所を営んでいる。洋風を模した看板建築で登録文化財に登録されている。そんな建物だからか古民家の相談が寄せられる。改修、移築、曳き家、さまざまである。古い建物を探している人、古い建物を処分できずに活用してほしい人、そんな相談からマッチングし、古民家の再生をする。それが松本の景観の維持にもつながると考えている。

一方、建築士事務所協会でもまちづくりの提案をしている。ある地域を設定し、その地域をこうしたらどうかと提案するもので、実行されるかどうかはさておき提案する。しかしそれでは何も変わらないと考えていた。そこで、ひとまず自分でやってみた。

昨年「旧犬飼呉服店」と出逢った。善光寺街道に面した昭和初期の町家。造りは見世蔵で、その奥には中庭を挟み土蔵がある。呉服店を営んでいた一人暮らしのおばあちゃんが亡くなり、活用してくれる人を探していた。その建物と景観を守るために、私の事務所で購入することにした。購入・施主・設計・施工・活用まで一貫して、ひとまず自分でやってみた。

建物は不同沈下しており、斜めに傾が^{かし}っていた。持ち上げて水平に戻すとともに、再沈下しないように基礎を固めた。外装・内装を含め計画以上の出費がかさみ、クライアントの気持ちが身にしみて理解できた。井戸掘り機を購入し、井戸も掘った。各工種の職人も段取りしてほぼ自営工事とした。もうすぐ完成し、料亭に生まれ変わる。登録文化財に申請する予定だ。これがモデルケースとなり、古い建物への投資から利益が生まれ、それがまちの景観保存の一助になれば幸いだ。



大正13年建造、事務所が入る旧医院



旧犬飼呉服店

交流委員会 Eグループ

施設見学会の開催

—屋形船からの東京夜景見学—



交流委員会
Eグループ
代表幹事
きんでん
若佐明継

3年ぶりの施設見学会

Eグループの懇親会を兼ねた毎年恒例の企画である「お台場夜景施設見学」は、コロナの影響により中止を余儀なくされていましたが、今年度は感染状況の緩和より3年ぶりに開催することができました。

納涼屋形船ということから、これまでのように7月末もしくは8月上旬にて計画をしていましたが、開催前に東京都の新規感染者が増え始めたため、夏の開催を断念し、3ヵ月ほど延期して11月の開催となりました。

今回は、第8波が襲来する前に、屋形船を運営されている船清さんが感染対策を充分に施してくれている環境の中で、約2時間、22名の方にご参加いただき、無事に施設見学会が開催できたことは、関係各位の方々のご支援の賜物と、この場を借りて感謝申し上げます。

いつもは、開催時期が夏で、明るいうちに品川を出発するので、お台場に向かう道中は夜景を見る状況ではなかったのですが、今年は11月に開催したことから、店先の提灯からもれた薄明かりが気分を盛り上げて迎えてくれました。よって、品川を出航した時から、照明器具や提灯が彩る夜景を堪能できたことは、新しい発見でした。皆様のご意見を聞きながら、次回以降の計画に役立てていければと感じています。

今回の施設見学会開催が実現できたように、徐々にではありますが、コロナが終息に向けて、状況が改善してきているように変化してきましたが、グループ会議や懇親会などの交流には、まだまだ制限がある状況です。今

回の施設見学会で、多くの仲間との懇親を通じて、皆さんの笑顔にまた会えたことは代表幹事としても大変嬉しく感じています。

今後の交流委員会活動について

コロナの影響もあり2年ほど延期されていたJIA建築家大会も沖縄で開催されました。また、関東甲信越支部交流委員会ではフレンズカップ大会(ゴルフコンペ)も開催されました。引き続き、Eグループメンバーに、交流委員会の活動に参加を促していきたいと思います。

日本では少子高齢化などによる人手不足、ロシア・ウクライナ戦争に伴う円安による物価上昇などで起因する材料費の高騰や納期の問題等、さまざまな問題が山積しています。

Eグループの電気業界も、発電コストの上昇による電気料金の問題や原子力発電稼働問題、使用済み核燃料の処理問題、洋上風力発電などの再生可能エネルギーへの対応など、早急に処理、対応していかなくてはならない問題があります。そのような問題に対応していくため、公益社団法人であるJIAの活動を通じて、設計部門、建築部門、設備部門で、新しい建築業界の仕組みや考え方など、新しい未来のために交流を行い、打開策を模索していかななくてはならないと感じています。

JIA関東甲信越支部交流委員会Eグループの活動を通じて、多くの方々と交流を大切に、活動に協力していきたいと考えております。引き続き、活動のご支援等のご協力をよろしくお願いします。



施設見学会(屋形船にて)

交流委員会 Fグループ

施設見学会・懇親会開催

—ヒアシンスハウスを見学—



交流委員会
Fグループ
三晃空調
重田誠紀

久しぶりの施設見学会

これまで新型コロナウイルス大流行の影響により実施できていなかった施設見学会と懇親会を、10月26日に久方ぶりに開催しました。途中予定延期もありましたが、感染者が少なくなった秋晴れの日に、見学会に加えて屋外での食事懇親会も行うことができました。

今回見学したのは、さいたま市の別所沼公園内にある「ヒアシンスハウス」です。参加者は25名。ヒアシンスハウス見学を1時間半、屋外バーベキュー懇親会を2時間開催しました。この建物をご紹介くださった石本建築事務所の関根部長様に感謝申し上げます。

ヒアシンスハウス

所在地：埼玉県さいたま市南区 別所沼公園内

ヒアシンスハウスは、詩人であり石本建築事務所に勤める建築家 たちほらみちぞう 立原道造が、1937年、当時23歳の時に自分の別荘として考えたものです。彼は東京日本橋で生まれ育ち、文学仲間が多く、浦和は友人の詩人たちと週末を過ごすのに好都合の場所でした。自らの独居住宅を「ヒアシンスハウス」と名付け、別所沼に建てようと試案しました。建物は、彼の文学と建築の創造の場だった自宅の屋根裏部屋をそのまま別所沼のほとりに移したような、誰もが小さい頃から夢見た自分だけの秘密基地のような構想でした。

彼はこの構想の翌年に結核のため亡くなりましたが、

彼自身のピュアな夢が結晶したこの小さな部屋を通して、彼の内面をうかがい知ることができます。

残念ながら実現されなかった建物は、詩人や建築家の呼びかけで市民運動によって2004年にスケッチを元に竣工。立原の夢が実現しました。

緑豊かな別所沼の風や光の中に立つヒアシンスハウスは、大きな窓が特徴的な5坪足らずの空間ですが、立原の夢が凝縮されています。

また、「ヒアシンスハウスの会」も発足され、立原道造の夢の家の維持管理を行いながら、芸術と自然への愛を育むシンボルとして活用し、地域文化創造の場となるよう、会員、ボランティアの皆様が活動されています。

ヒアシンスハウスの建設思想は、実現することのない夢も「いつかは誰かにより引き継がれる」という希望を伝えるための「夢の継承事業」であります。この思想は、石本建築事務所に受け継がれており、社会が変化しても「変わらない」想いとして大切に継承されておられるとのことでした。

その後の懇親会

懇親会は別所沼会館の庭園でバーベキューを行いました。屋外とは言え、コロナ感染防止対策を万全にし、ほぼ全員に参加していただき、和やかに楽しい時間を過ごすことができました。



ヒアシンスハウスの内部



懇親会の様子

相手の声に耳を傾け 今この時に全力を尽くす



萩尾昌則

「建築のはじまりかた」という明快なようで難解なテーマである。自分が『建築』というものをどう捉えるのかという『建築』のはじまりかたと捉えるべきなのか、業務としてのプロジェクトのスタートという意味での『建築』プロジェクトのはじまりかたと捉えるべきなのか。両者は相即不離であり、両方の視点が昇華されて『建築』は形づくられる。

『建築』プロジェクトのはじまりかた

継続的にプロジェクトを依頼していただける施主に関しては、顧客満足度の高い良い仕事を成し遂げることが次の仕事の「はじまり」に通じる。施主の満足が信頼となり、ご縁がさらに発展するという関係である。

新規プロジェクトの場合、コンペ・提案の機会のお声掛けというケースもあれば、すでにご縁のある施主からのご紹介というケースもあれば、ホームページへの書き込みによる依頼などさまざまなケースがあるが、いずれの場合でも何らかの実績を気に留めていただいた結果の「はじまり」となる。その意味で、業務の切っ掛けという視点では、「常に今現在取り組んでいるプロジェクトに全力を尽くすこと」が結果的に次のプロジェクトへの「はじまり」となる。

さて、業務としてスタートしてからの建築プロジェクトの「はじまり」において、もっとも心掛けるべき点は、建築プロジェクトは建築家（設計者）のものではない、ということ。施主あつての建築プロジェクトなのである。その意味を理解せずにプロジェクト成果を「作品」と称することは、極めておこがましいことだと思う。

用途、そこで実現したいこと、予算等、プロジェクトのスタート時には施主の想いと与条件が存在する。相手（施主）の声に耳を傾ける、それこそが『建築』プロジェクトのはじまりかたなのだと思う。

そしてスタートに際しては、どんなにAIが発達しても、敷地を直接見ることがやはり欠かせない。現場百遍、相手（敷地）の声に耳を傾ける、それも『建築』プロジェクトのはじまりかたなのだと思う。

自分なりの心得があるとすれば、蟻（ミクロ）の視点

と神（俯瞰）の視点だろうか。ミクロ化したウルトラセブンのように自らのスケールを図面のスケールに合わせて極小化し見渡す視点と、巨大化したウルトラセブンのように神が空から全体を俯瞰し全てを関係付けるように大きく見渡す視点の、2つの視点で同時に思考することを、『建築』プロジェクトのはじまりに心掛けている。

『建築』のはじまりかた

相手の声に耳を傾けるといっても「何でも施主の言う通りにする」ということではない。施主のニーズを紐解き、特に潜在ニーズ（Needs）を導き出し、ウォンツ（Wants）に変換することが必要である。設計という営為は、建物完成前の図面に業務費を支払っていただく稀有な行為だが、潜在ニーズをウォンツに変換するためには、それを行うためのコミュニケーションと洞察と構想力のスキルが設計者には求められる。

設計という行為は、敷地という余白から一本の線を読み解き、それを図面化する営為とも言えるが、相手（施主・敷地）の声から一本の線を見つけ出すことは、自らも含めプロジェクトに関わる人々の『建築』への想いというフィルターを通すことではじめて可能となる。特に現代ではさまざまな社会的な課題があるが、『建築』はその課題解決に少なからず貢献することができる。自らが向かい合うべき社会的課題を常日頃より自分ごととして考察し、建築プロジェクトの機会を通して、施主のウォンツを形にしながら、施主と共に社会的課題解決にも取り組んでいく。その過程の中に自分ごと化した『建築』への想いが組み込まれるとき、施主のウォンツの実現を超えた『建築』が生まれるのではなかろうか。社会的な課題解決のための『建築』をひとりひとりが自分ごととして考え続けること、それが何よりも大切である。

『建築』には無限の可能性があり、『建築』に係ることで世界的な課題解決に貢献できる。「建築のはじまり」は「世界とのコミュニケーション」のはじまりだ。あらゆることが『建築』につながるのだ。故に『建築』に係る人々に休みは無い。

みんなの顔が見える 居場所をつくる



庵原義隆

2003年東京大学工学部建築学科卒業

学生時代

私の大学では2年生の後期から専門の学科に進むため、入学してからしばらくはどの学科に進むか決められずにいました。広場や橋のような、人が集まり利用するものに漠然と興味があったので、建築だけではなく都市計画や土木も面白そうだと思っていましたが、とある建築家の講義を聞いたところ、「建築をやっていれば都市計画も土木もできる」という内容で、それを真正面に信じて建築学科に進むことにしました。

そのようなこともあり、卒業設計までの設計製図の課題では、川べりの土手が街中に延びてそのまま建物になるような、外部が思考の中心となった案ばかりを制作していました。

卒業設計

卒業設計でも、外部を中心に組み組もうと考え、当初は道を設計したいと考えていました。

敷地は、北千住駅近くの隅田川と荒川に挟まれた島の西端、千住緑町という、戦後、小さな工場が集まって復興を遂げた町を選びました。かつては職住が近接した近所付き合いの多い生活をしていましたが、工場の衰退とともに、地域交流もなく空き地の目立つ町になってしまっていると感じたため、それぞれの家の中で閉じてしまっていた、住んでいる人の顔が再び見えてくる、表情豊かな町にすることをテーマとしました。

しかし、具体的に考えれば考えるほど、外部の広場や道だけでは人の生活は変えられない、と思えてきました。そこで、都市・街区・道などの外部から、部屋・その中のモノなどの内部までをスケールを横断して総合的に組み上げることに切り替えました。とはいえ、これが壮大すぎるテーマとなってしまう、途中でどんな建物をつくらばいいのか全く分からなくなっていました。

何度も何度も呪文のようにシナリオを唱え続けて、ようやく見えてきたのは、1軒1軒を変えるのではなく、街区のみんなですべて使える建物をつくる、というアイデアでした。それは、建築学科に入る前に漠然とつくりたかった、「人が集まる場所」を建物として実現した、インテリアのある立体的な広場のように感じられました。

ここまできたのが提出の1週間前、手伝ってくれた後輩たちと図面を描いて、模型をつくって、と怒涛の日々を過ごして何とか提出までこぎつけました。



卒業設計「千住百面町」
せんだいデザインリーグ卒業設計日本一決定戦2003で日本一受賞

日本一決定戦

期限ぎりぎりで提出した卒業設計は、思いの丈を満足に表現することができず、大学では銀賞止まりで大変悔しい思いをしました。

ちょうどこの年、第1回目の「せんだいデザインリーグ卒業設計日本一決定戦」がありました。大学で最も良かった作品を提出しようということで、車の免許を持っていた私が、友人の模型を東京から仙台まで運ぶことになり、そのついでに、自分の作品も提出してみることにしました。結果、必要な提出物の量が減ったことで密度が上がったせいか、予想もしていなかった日本一に選ばれました。見る人が変われば評価も変わる、そして、あきらめないで考え続けたことは誰かには伝わる、ということを実感しました。そして何より、集まった学生の活気に加えて、館を訪れた普段は建築に興味がないであろう人たちも世代を超えて混ざり合った会場の雰囲気は素晴らしく、それを可能にした「せんだいメディアテーク」にとっても感動しました。

動き始めて

日本一決定戦の審査委員長であり、せんだいメディアテークを設計した伊東豊雄さんの事務所に行けたことは本当に幸運で、まさにみんなの居場所と言えるような建物の設計に関わることができました。「多摩美術大学図書館」では、大学内の学科間の交流や近隣住民との関係を考え、「ぎふメディアコスモス」では、地域の人々の顔が見えてくることを主題に、図書館を中心とした滞在型の文化複合施設をつくりあげることに関わることができました。

独立して自分の設計事務所を始めたこれからも、「みんなの顔が見える居場所」をつくるべく、これまでの経験を活かして、多くの人々の関係が生まれる建物を設計できればと考えています。

小さな建築家

—空間デザインワークショップに参加して—



学生の会 @joint
日本大学理工学部
建築学科3年
高松えみり

昨年10月にさいたま市別所沼公園で開催された、JIA埼玉(埼玉地域会)主催の、竹を使ったドームをつくる空間デザインワークショップのお手伝いに参加させていただきました。2日間にわたるワークショップには、幼稚園生から小学校高学年までたくさん子どもたちが参加し、青空の中ひとつになって作業しました。

スタードームは大人でもつくるのが大変で、とれたての長い竹を竹割機で割り、寸法を測ってドリルで穴を開け、そこで準備はひと段落。そこからスター型に竹を交互に編み込んでいき、紐を通して結んでいきます。最後に、大人と子ども総出で持ち上げて紐でくくってドーム完成！その達成感に拍手と「お～」と歓声が上がリ、みんなでドームの中に入りました。ドームの中は、大人立ち入り禁止の子どもだけの居場所だったり、お母さんも入って団らんしていたり、お菓子を食べる子も、塗り絵をする子も、それぞれの空間で思い思いの時間を過ごしていました。

私がおじゃました小学校低学年の女の子2人がつくった小さなスタードームでは、半分床が敷いてあり休む場所、



最終日、竹のトンネルでスタードームがひとつになり、大きなおうちが完成

半分は何も敷いてない土間がつくられていました。同じスタードームでも個性があり、布をかけてみたり、絵を描いた窓を貼ってみたり、開け閉めできるドアをつくってみたり、細部に宿るこだわりはまさに建築家！1人1人の個性が集まって空間ができていく姿を目の当たりにしました。

最終日、大中小3つのスタードームは竹のトンネルでひとつになり、ヒアシンスハウス前の空き地に大きなみんなのおうちができました。

次世代のタマゴたち



今自分にできることを

学生の会 @joint 野村月咲
日本大学理工学部建築学科3年

「コロナだからしょうがない」そんな言葉を大学生生活の間に何度も言い、聞きました。やりたいことが思うようにできないことが起きるたびに、そんな気持ちになっていました。大学生になったら海外に建築ボランティアに行くことが私のひとつの夢でしたが、それもこのご時世ではなかなか厳しいものでした。大学生生活も、学生同士会えないもどかしさの中過ごす時間が長く続きました。

しかし、漠然と建築に関わりたいたいと思い建築学科に入学した私にとっては、コロナ禍はとても有意義な時間になっていたようにも思います。自分と向き合い建築を学ぶ中で、自分が何に対して興味を惹かれるか、その興味が好きなまでに突き詰め知ることができました。そして、限られた環境の中で何ができて何をすべきかを考え、積極的に行動す



沖縄で見た、東京とは全く異なる街の景色

ることが1番自分を成長させるということに気付かされました。

決して私たちはコロナ禍によって失ったものばかりではないと思います。学生会員として参加した沖縄建築家大会において、たくさんの建築家の方々と交流できたことは大変貴重な時間でした。建築に対して関わり方が十人十色であり、そのひとつひとつのお話がとても新鮮でした。それは決してインターネット等では知り得ないものであり、会って話すということの良さをとても実感した時でした。

目標に対してひるまず積極的に挑戦し、未来の自分に恥じない今の自分で居続けたいと思います。これからも、@jointを通して建築のさまざまなことに関わっていくことが楽しみです。

週末の愉しみ

単身赴任で東京に来て早10年。先輩に勧められ体力維持を兼ねた趣味として始めたサイクリングですが、今ではすっかり生活の一部になりました。サウナに行ったりゴルフをしたり、他にも趣味はありますが、私にはサイクリングがいちばん合っているようです。自転車に乗って走っていると普段感じることの少ない「風」や「自然の匂い」に触れられ、日常生活のモヤモヤが消えていくのを感じることができます。

江戸川区一之江在住の私がよく出かけるコースは、水元公園一周コース。途中の江戸川の堤防道路は災害用道路も兼ねて広めに整備されており、休日にはランナーやサイクリスト、ローラースケートや一輪車を楽しむ人で、さまざまな人が思い思いに趣味を満喫しています。

目的地の都立水元公園は東京都の東部、葛飾区に位置し、埼玉県（三郷市）に接している都内最大の水郷公園です。園内は豊かな森林と水郷風景を楽しめ、高さ20mにも達するポプラ並木の横を走っていると北海道に来たかのような気分を味わえ、メタセコイアの森は海外の景色のようで東京にいることを忘れさせてくれます。また、人が入ることができないバードサンクチュアリーは、自然環境に近い水辺に設置しており、さまざまな鳥を観察することができます。



愛車のコルナゴ（水元公園にて）

広大な園内ではさまざまな種類の植物を鑑賞することで季節の移り変わりを感じることができます。春には桜はもちろん花菖蒲、スイレン、カキツバタなど、夏にはオニバス、ノウゼンカズラ、ムクゲなど、秋にはススキ、ヒガンバナ、冬はメタセコイアの紅葉が見事です。

都会の生活で家とオフィスを往復する日々、またはテレワークの中で自然を感じる機会が減っていると思いますが、それは意外と身近なところにあります。

皆さんも今週末、ちょっと出かけてみませんか？ 気分がスッキリしますよ。

（交流委員会Aグループ 浅沼俊宏）

この1年のJIA活動を振り返って

- ソニーの出口さんのインタビューでは、出口さんのデザインに対するストイックさを感じました。今年度得た良い刺激の1つでした。（佐久間）
- 今年度はBulletinWGに加えて住宅部会長も務め、仕事以外にも忙殺された年度でした。来年度は裏方からサポートします！（関本）
- コロナ禍でできることを考える活動が、正会員との交流を深める結果となった。苦しい状況だが、JIA協会員で良かったと感じている。（知見）
- JIAの活動はなかなか大変でしたが、杉並地域会は活発に活動して、2月4日岸本区長も参加されて大盛会でした。（立石）
- 常任幹事の6年目、支部幹事長の役目を仰せつかり最終コーナーを奮闘いたしました。気づけば広報委員も最後の年、走りぬぎました。（中澤）

編集後記

- 執筆依頼を担当した連載「良質な建築、これからのまちづくり」は毎月興味深く拝読させていただきました。引き続きよろしくお願いします。（竹内）
- 夏から始まり秋冬春、みんなに助けられ無事に発刊できました、苦勞も多かったのですが、大変勉強になった1年間でした。（望月）
- 支部広報委員会6年目の今年度、NPO建築家教育推進機構委員に加え、支部副幹事長、本部広報系WG主査とめくるめく日々！（会田）
- 3年振りに開催された建築家大会で、参加してくれた学生会員と@jointの活動を各支部に紹介できたことが一番の成果です。（市村）
- 学生の会の仲間や大人の方々との繋がりが増え、よりいっそう活動が賑やかになりました！来年度も活動の幅を広げて頑張ります！（長谷川）

編集：公益社団法人日本建築家協会
関東甲信越支部 広報委員会
委員長：市村宏文
副委員長：中澤克秀
委員：会田友朗・望月厚司・関本竜太・伊藤立平・竹内祐一・佐久間達也・長谷川理奈
編集長：望月厚司
副編集長：関本竜太・佐久間達也
編集ワーキングメンバー：広報委員+吉田満・小倉直幸・井筒悠斗・知見徹摩・立石博巳
編集・制作：南風舎

Bulletin 295 2023 春号
発行日：令和5年3月15日
発行人：大西摩弥
発行所：公益社団法人日本建築家協会 関東甲信越支部
〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 2-3-18 JIA館
Tel：03-3408-8291（代） Fax：03-3408-8294
印刷：株式会社 ココロ（旧社名：株式会社 協進印刷）
■JIA 関東甲信越支部関連サイト一覧
・（公社）日本建築家協会（JIA） <http://www.jia.or.jp/>
・JIA 関東甲信越支部 <https://www.jia-kanto.org/>

■定価 300円＋税／会員の購読料は会費に含まれています。

©公益社団法人日本建築家協会 関東甲信越支部 2023

「快適な生活空間を創造し、提案する。」

個人住宅からオフィス、ホテル、商業施設、公共施設などの空間作りをインテリアという視点からトータルにご提案します。



〒160-8315
東京都新宿区西新宿 7-5-20
TEL: 03-3366-7865

リリカラのホームページは
こちらから

